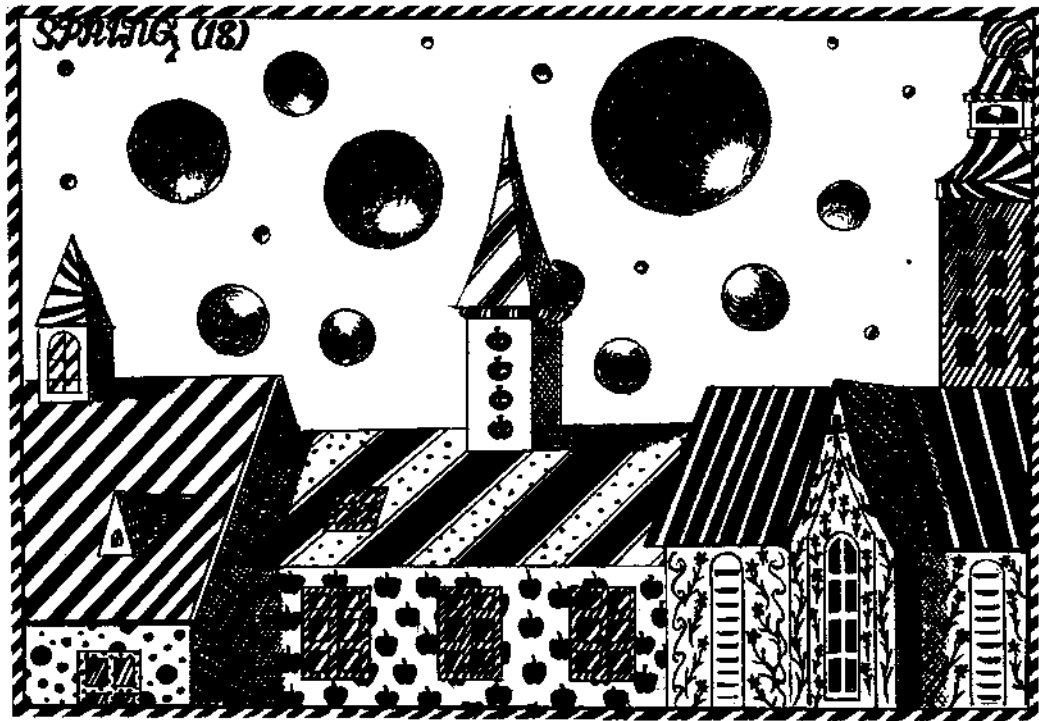




巻 頭 言

あなたの心には火が燃えていますか？ 今の日本、
とっても冷えています。不況はますます長期化の様
相を呈し、商都大阪のビルディングの谷間にとびか
う商売の声も心なしか共鳴を忘れて弱々しい……。
でも私達の心の中にはまだ熱いものが残されてい
ます。私達の胸にとるその灯の一握りを今ここに
送ります。次の世紀をになう私達。あなたの心の灯
で、もう一度暖かみのある人間社会をよみがえらせ
てみませんか。それが私達のスプリング……

目次

☆ 巻頭言	1
☆ 自治会	4
前・後期会長として	4
前・後期副会長として	6
☆ 行事紹介	9
校外教授・クラスマッチ・文化祭	
コーラス大会・水泳訓練水泳大会	
体育大会・文化クラブ発表会・マラソン大会	
☆ 随想	
夫のため子のため世の人のため	13
講談社学術文庫のすすめ	14
冬の旅と私	15
☆ クラス紹介	17
28クラス	
☆ クラブ紹介	31
全クラブ	

☆ アンケート	36
☆ 先生紹介	39
浜田先生・高岡先生・石川先生 片岡先生・渡辺先生・岡先生	
☆ 文芸	42
自分らしく生きること	3年3組 和田中子
いりゅうじょん	1年6組 松嶋康介
☆ 編集後記	48

表紙デザイン・カット

2年6組 広瀬正彦

前・後期会長として



会長 広瀬 正彦

「まあこういった次第です。」

スプリングの原稿締切はとくに過ぎてしまったにもかかわらず文化部より依頼された本年度自治会の行事改革に関する解説文とおぼしき原稿は、寒さがしんしん身をつく十二月初頭の現在になってやっと執筆されている。人間文章を書くのは、やはり落ちついているほうが、そうでないよりはよさそうである。特にばくのような普段あまり物を書かない者にとってはよいのである。こうして筆が進み始めたのも、多忙を極めた自治会活動に、年内の仕事分における整理がついて、ひとまずの落ちつきが自治会本部に戻って来たからだといえそうだ。保健室の隣にある自治会本部室には、一般のホームルーム教室に先がけて、十一月の末からガストروبが入れられているが、この二、三日は出入りする人数も減り、ストروبを囲んで出る話も、自治会に関する話より、ありふれた世間話が多い。さて、自治会本部の扉を開いてははを突く寒気の外へ出てみたら……裏門からは、工事関係車両通行用の専用道が運動場をけずって設けられており、その上には横断用の歩道橋がかけられている。今や新校舎建築工事は着々と進められており、二分の一に削減されたテニスコートが強くそれを意識させる。

静閑といったものが、おそらくは今年度になって初めてであろうと感じられる自治会本部、それは逆に言えば今年度の自治会が例年

とくらべてとてもやるべきことを多々かかえていたということになる。いや、例年にくらべて、行事の開催数が急増したわけではない、数ではなくて中味が大きく変動されたのである。従って例年の施行方法をそのまま適用することはできなくなった。数々の変動をかかえ、もし下手な執行をすれば変更された行事はうまく固定化されず、米年度も今年度と同様、ひっくり返るような思いで自治会活動をしなければならなくなる。今年度はそういった、かなり切迫した課題を与えられた本校自治会であったが、本部役員のみならず、各部署の役員の方々は本部から割り当てられた仕事をよく全うして下さったし、また同時に一般自治会員の皆さんが、行事の急変にもかかわらずお互いに協力しあって、各行事の成功に尽力されたことが、なんといいても、本部がどうにかこうにかやってこれた最大の原動力である。この場をお借りして一言感謝の意を述べさせていただく。

「どうも御協力ありがとうございました。」

さて前置きがえらく長くなってしまったが、本題に入っていこう。具体的に本年度がいかなる改革の年であったかを述べる前に、ひとつ、何故諸行事が変更されるようになったのかといういきさつから話していこう。五十二年十二月現在の二年生、三年生の方々はよく御存知であろうが、従来我が校の諸行事というものはその絶対数において異常なまでに多かった。バレーボール大会・自治会祭・北野交歓試合・水泳大会・体育大会・文化祭・バスケットボール大会・ハンドボール大会・サッカー大会・ラグビー大会・マラソン大会……なんと七十五文字を要した。高等学校においては、定期考査終了後は授業がないし、休暇明けには実力考査もある。前述の諸行事を、我が校では「テストの間を縫って行ってきた」のである。まさに縫

ってきたと言っている。特に九月から十月にかけての行事集中こそは筆舌形容に尽くし難い。夏休みが明けるとすぐ水泳大会、アチーブメントテスト（実力考査）があつて一週間ほどでコーラス大会予選、また一週間で体育大会、コーラス大会二次予選が続き十月初めには文化祭がやってくる。十日もしないうちに二年生は修学旅行前の中間考査、その後二年生の旅行中に一年三年の中間考査。一言で言つて「たまらない」一カ月である。他校の友達などに話をするとなら「ええやないか、それだけ行事が続いたら楽しいやろなあ。」とうらやましそうに答える。冗談じゃない、あの行事集中に際して楽しさだけを味わえた本校生徒がいたとしたら、その人は人並みはずれた要領のよさを持つておられる。但しおそらくは悪い意味にとつていただいた方がよいであろう要領のよさ、つまりサボタージュのうまい人であろうなあ。筆者など、中間考査を前にして心身共にガス欠に陥り、苦い思いをしたものだ。コーラス大会の練習、体育大会の応援練習、準備、文化祭の準備と来た日には、朝練、昼練、放課後練、あしんど。

行事集中の問題が最初に提起されたのはそう最近のことではない。もう一昔も前の話になろうとしている。何故こんなにも多くの行事が……。今となつては明確な答えは与えられるすべもない。昔から本校の生徒が「やりたがり」であつたのか？ おそらくは一つ一つの行事が加えられていくうちにいつか昨年度のような行事の目白押し状態になつてしまつたのだらう。さながらあれもこれもとインテリアを買い求めているうち部屋の中で身の置き場に困つてしまつた人間のような息苦しさや状況打開の必要性に迫られ、何度となく行事改革の声が挙げられていた。しかし、のどもとすぎれば熱さ忘

れるではないけれども、秋の行事集中期をどうにかこうにか通り過ぎて、あとは何とかいけるという頃になるとみんな一息ついてしまつて、改革を叫ぶ声も湿りがちになるといった具合で年を経てなお状況打開のきっかけをつかめないで来たというわけである。しかし昨年度（五十一年度）、この改革熱は自治会本部に再びよみがえつた。後期にはいり、各クラスの会長を常任委員として、一般生徒の参加も自由に認めるという「行事検討委員会」が発足し、当時の状況に対する意見から聴取、検討され、具体的な打開案に及んで話し合われた。筆者もクラスの会長をしていたので毎週一回五時すぎまで残つて話し合つたことは記憶に新しい。当時二年生の自治会本部役員あるいはクラス会長をしておられた方々の熱意は相当なもので、ともすれば話し合ひは熱論と化した。思えば本年度の行事改革の大きな礎となつた委員会だつたように思う。

そこでかなりの構想がまとめられた。毎年一学期に行なわれていた北野交歓試合は北野高校側の意見もあつて廃止されることになつたので、一つ行事は減少した。しかし根本的な問題は前述したとおりなる秋の行事集中と、さらにもう一つ、自治会祭の開催意義であり、これこそが改革されなければ話にならないのである。自治会祭とは北野交歓の前に授業を後半3時間ほどつぶして行なわれ、校外非公開、参加は一般のクラスだけというもので、従来文化祭というのが、一般公開であるのに加え文化系クラブの発表中心で、クラス参加がその内容によつて相当の開催制限が加えられていたため、クラスとしても自由にかつ重点を置いて発表展示を行なう機会が欲しいという主旨から発足したものである。しかし、年月回数を経るに従ひ、文化祭においてもクラスの発表展示におけるウェイトは

文化系クラブと同等あるいはそれ以上を占めるようになってきたし、内容に関する規則も緩和された。また、それにともなって、文化祭と自治会祭におけるクラス参加の出し物が酷似するようになった。そこで自治会祭の存在意義が非常に薄らいできたわけである。

さてこの二つの根本問題を打開する策として、自治会祭を廃止し、体育大会または文化祭のうちいずれかを一学期に移動してはどうかという構想のもとに、検討が進められた結果、体育大会は、体育科のカリキュラムの都合でどうしても移動できないということで、文化祭（コーラス大会も含めて）を一学期に移動することになったのである。おりから、来たる昭和五十四年度より大学入試制度が大きく変わり、国公立大学の共通一次テスト化により、入試一次がおそくとも一月には行なわれることとなった。となると願書は十一月頃には提出しなければならず、十月に文化祭でどんちゃん騒ぎもなからうから、前述の改革構想はまことにタイムリーであったわけだ。

六月文化祭。この構想を基盤に、本年度自治会は出発した。くしくも新校舎改築工事が重なり、なんだか今年一年間のはうが従来の集中期より「混乱」という形容詞の使い道には適しているみたいになったが、冷静に判断して全般的に行事集中は緩和された。春の行事集中などといった不細工な事態を回避するため、従来は昼休み、放課後を利用し、数日間を要して行なわれていたバレーボール大会を、午後の授業をカットして一括して行なった。運営方法にはまだまだ改善の必要ありだが、日数は大いにかせげて、コーラス大会の練習と重なる分が減った。文化祭本番においては、第一日目第二部（夕方の部）の企画が、まだまだツルツルといわれても仕方ない状態だった。コーラス大会の制度改革も更に内容を検討し、今後のた

めに固めていかねばならないだろう。

結局本年度は地ならしの域をそれほど越えられなかったかもしれない。今年の変動による不安定さからして、人によれば、行事集中はあっても、例年してきたことをまたするだけの、一応安定感がある以前の状態を支持するかもしれない。しかし、我々は前に進まねばならない。だめなように見えるから以前に戻るといふのは生活のためにやむを得ず取る大人のやりくちではないか。今の大手前の現状を生きる私達がしなければならぬのは、今年行なった改革をもとにしてさらにそれを充実させ、新しい時代に沿った自治会の諸行事制度をつくっていくことである。批判大いにけっこう。しかしそれが何かを生み出すもととならなければ、単なるアマノジャクにすぎない。よくが仕事をしたのか、それとも仕事にはよくが使われたのかわからないような感じだが、とにかくにも大手前のうぐいす張りの上を、歩くのと同じだけかけ足で走りまわった我々本部役員にはそう断言することができると思っている次第である。

前・後期副会長として

副会長 森 義 仁

時は流れ移り行き、行き着いた所が何か足下がまるで雲の様に不安定な場所、私はそんな所の真中であてもなく徘徊する時勢に操つられた人形です。時は廻り約一年前、私は一つ筋の通った事をやりたいと思っていた矢先に自治会の話があり、それを聞くやいなやそ

れに飛び付いてしまいました。しかしあの時にはそれ相当の勇氣が必要でした。その時まで私はあまり自分から進んでやるという事が少なかった、いやわずかながらでも自分からの意欲は存在していたのですが、何分性格として気の大きい方ではないために漫然と過して来たのでしょうか。そしてあの時の決断は私の進む道の方を大きく変えてくれました。それに伴い私の考え方も変わりました。

三月もおし迫り冬の寒さも少し緩み、春のあの陽気さがすぐその隣町まで来ていそうなる日、教室ではテストも終り試験休み中なのでうれしがり連中が学校に来ては騒いでいました（恥かしいことながら私もその一味の一人でしたが）。部屋の片隅でドラ三発で満貫のY君と52年度会長の広瀬氏が何か難しいお話中、ふと耳を澄ましてみると、どうやらそれは自治会の話でありました。ずっと聞いていると広瀬氏が自治会会長に出馬するらしいのですが、副会長がまだ未決定、そこで常々何かやりたいと思っていたので私が出馬するとY君に言うとかよく受けてくれました。私はその時はっとしました。私は部屋の外に出ました。グラウンドではラグビー部の諸君が風を切って突進していました。私はその時「高校二年という青春を自治会というえたいの知れないものに費やしてみよう」と思いました。このようなことに参加するのは初めてだし、そのような事に関する知識も何一つないので「不安」という文字がその時から私の頭の中でずっしりと居座りついた事も忘れはしません。そして私にとって高校生活の二年が朝日が登る如く始まりました。今年は去年とは違い国立大学一次試験の実施の影響で行事変更を実行することになりました。例年ならその前年の資料を参考にできるので、それが白紙の状態から持って行かねばなりませんでした。まず秋の

コーラス大会と文化祭が5月と6月に行われますので、副会長に就任したばかりの私にとりましてそれは忙がしいものでした。その上その二つの行事の間には中間考査がはさまっていたものでしたから、忙しさは倍増、でも意欲に満ちた（私だけがそう感じたのかもしれませんが）私には楽しいものでした。他の役員の方々も一生懸命でした。何か一つの事を皆で力を合わせてやることほどすばらしいものはないのだ、今もそのことは虚構ではなく実在なんだと感じています。私に与えられた最大の任務は文化祭二日目の総務でした。私は軽音楽部の部長も兼ねていましたので、なかなかうまく計画が軌道に乗りませんでした。幾度か投げ出してしまいそうになりましたがそれを取り越え計画を忠実に遂行しました。その際には私の補佐をしてくれたY君などが助け船を出してくれました。この場を借りてY君にあの時の礼を一言述べさせていただきます。今から考えるとあの頃の奮闘もまるで夢の様でもあります。昨年一年生の時にも軽音楽部で文化祭二日目に出場しました。衣裳を着込み、ステージに立ったのはいいのだが天が私を見放したのかスポットライトが私に当たらないのです。だから客席から見れば私は影法師でした。それは大いに遺憾とする事件でした。しかし二年生の文化祭のステージでは念願のスポットライトを浴び大いに満足したことでした。一年生の出場の時には二日目の実施に関する苦勞など考える余地など一かからありませんでした。それが一変し私が実施者側の立場に立ち、その苦勞を味わいました。何をするにも縁の下の方持ちが存在するのだと言う事を特に自分に対しても、またこれからの大手前の担い手の諸君たちにも認識して欲しいのです。今年は国民会館で、第二日目が実施されました。昨年は森ノ宮の青少年会館という近代的な

ビルディングでやりましたが今年は設備も悪く、最悪な事に照明器具が会館設立当時の物なので使用に値せず、他から借りる始末でした。先生に今年はしょうがないが（日程的に青少年会館が借りられませんでした）来年は青少年会館でとの私の願いにもあつてなく、「それは無理だ」と言われましてガックリしました。来年は会場は悪いけれどもその穴を内容の充実で相殺して欲しいと次期自治会本部にお願いします。その頃の季節は梅雨の最中で、雨しとしとと、物をさする様に這い、町は静まりかえり雨の音が私の耳にハーブの音色の様に聞こえました。文化祭も無事に済み、仕事はあるのですが少し暇にも感じました。本部ではあの多忙さは消えしーんと静まり、空の雨雲の間から洩れた鈍い光だけが射し込み、何だか空しく悲しくなってきた。そんな日々が続きそして梅雨も上り、太陽の光がガラガラと照らす夏がやって来ました。夏といえば夏休み、この期間は自治会本部もお休みなのです。私のためには休みが存在しない方がいいのです。別に学校で勉強したい訳ではありません。勉強はしなくてもいいが学校で何かすることがあればいいのということなのです。何の思いつきか、ふと海へ行きました。それも大阪からは約百キロを南下した南の海です。海の色はコバルトブルーで都会に住む私の目には少し美しすぎました。一時間ぐらい崖の端に座っていました。寄せては返しまだそれをくり返す波をずっと眺めていました。ふとその時その同じ様な動作を見てまるで波が自分の様に感じました。絶えず実践を行っていても、自分の居る所は相変わらず同じ場所ではないのかと思ひ付いたのです。一学期間、さまざまな事をやってきて少しは自分も以前の自分の位置より移動したのだと思っていたが実は同じ位置で僅かに振動して

いただけなのだ……以前の自分と同じなのではないかと思いました。そしてまた考えました。

残暑が過ぎ落葉が舞う秋になりました。十月からは後期自治会本部の活動が始まります。私も初めは引き続いて副会長をやるつもりはなかったのですが、以前から目を付けて置いていた二、三人に立候補を頼みに行きましたが皆さん声を揃えて「NO」。私はこのままだと留任という羽目に落ち入ると悩みました。私は決意しました。「後期も引き続いてこまで来たら半年も一年も同じこと、でもやるからにはあやふやな気持ではダメです。再度初心に戻り新しい気持でスタートしてやる」と決めたのです。

後期まもなく修学旅行がありました。久しぶりに自然と親しみ、そして融合して一体となれました。自然はど人の心を休めてくれるものはありません。特にあの阿蘇の雄大さをこの目で実際見ていると周囲の人々は消え、自分一人がそこに居るように私の視界を幻想の世界へと導く様に感じました。九州は自然に恵まれた地方です。その自然を見て帰阪したとき、明らかに私は少しだけでも変わっていました（他の人には気づかれないくらい）。再び初心に戻り一からやり直そうと心に誓ったのです。次期自治会本部及び後輩の諸君たちに柳に飛びつくかえるになつて欲しいものです。

私はこの一年間何をしたらかと聞かれる質問ほど辛い事はないのです。水が流れるが如く時も常に流れているので立ち止まれば自然と時は経過して、限られた時間は刻々と縮まりつつあるのです。でも柳に飛びつくかえるの様に時間を費やしても、最善を尽して欲しいものです。これだけが副会長として後輩諸君に贈るただ一つの言葉、願い事なのです。

行事紹介



校外教授

無事にあこがれの(?)大手前高校に入学し、そろそろ学校のふん囲気にも慣れたところに、校外教授なるものがあると聞かされた。始めは、一体何をするのだろうと思っただが、行ってみると何のことはない、中学校の時には遠足などと呼んでいたものだった。

一回目の校外教授は四月におこなわれ、もう記憶の方も薄れてしまったので、二回目のことについて述べることにしよう。

十月二十日、二学期中間テストのあくる日に、山科方面へ向けておこなわれた校外教授は、天候にもめぐまれ、無事行なわれたのであった。テストの苦しみから、ひととき解放された我々は、一日を楽しくすごしたのだった。クラス単位の行動ということになってわがクラスは、他のクラスが南へ行くところを北に進路をとり、大文字山にむかうことになった。快い汗を流しながら山を登っていった我々の前から、突如として道が消えるというハプニングが起こり、世間では道に迷うなどという、木がうつそうと茂る中、途方にくれたが何とか頂上についたのだった。そのあと、昼食をすまし、三条へと向った。バスにゆられ、やっとの思いでたどりついた我々は、加茂川の川岸に腰をおろし、右なげや、ボール遊びなどをして、一ときをくつろいだ。いろいろなハプニングもおこり、クラスメイトや担任の先生の思ってもない一面の発見もできこの日を機会に、いままで以上にクラスの和が深まったのであった。

クラスマッチ

まず、一学期がはじまってすぐに、バレーボール大会が男女共に開かれます。はじめてのクラスマッチということもあって各クラスとも力だめしといったところです。

次に、秋も深まる十一月になると男子はバスケットボール大会が、女子はハンドボール大会が開かれます。この頃は気候もよろしく、熱戦がくりひろげられます。なかでも女子ハンドボールはあまりの熱心さに女子ラグビーと陰口が出るほど。

その他、サッカー大会、ラグビー大会等が計画されておりまして、クラスの団結、クラス意識を高めます。

文化祭

二大行事のひとつであり、他校の人々や父兄などの来校の一番多い行事である。具体的には、第一日目第一部は、講堂で行われるクラス単位での劇・ゲームなどの演技的な催し、又、中庭や、各クラス教室で行われるバザー・喫茶など。それに加え、クラブ（文化系）の展示や、クラス発表としての展示、と盛りだくさんで、体育館での素人名人会、音楽室でのミニコンサートなどあつという間に過ぎてしまう。夕方からの第二部では、コーラスやフォークダンスなど本当に楽しい（もちろん内部者のみ）。だんだんと日は暮れ、文化祭第一日は終了する。続いて翌第二日は、国民会館での演技発表がある。コーラス部の合唱、軽音班の演奏、ブラスバンド同好会の演奏、ダンス同好会のダンス発表、落語同好会による一席。他に演

劇部・ESS・放送部等の演技と、どれもこれも、熱のこもったすばらしいもので、見る者の目を十分楽しませてくれる。こうして二日間の文化祭が終了する。文化祭が、昭和52年度から6月に移動されたため、新一年生の入部前の春休みから、構想を練り、実質は新二年生独力で文化祭を迎えることになるので、文化系クラブの努力は大変なものであるように思われます。そのためにも新一年生はできるだけ早く文化系クラブに入部してほしいというのが、全クラブからの願いでした。文化祭一般を通して言えることは、大変面白いことで、いつもは三無主義を誇る大手前生も、なかなかーと思わせるところがあるのだなあと感激したり……。それに、誰もかれも主演する人が役者ぞろいなのは、本当に驚きました。一番盛んな一番面白い行事に思われます。

コーラス大会

文化祭前に文化祭の準備と平行して行なわれるのが、このコーラス大会。皆さん多忙の中を早いところでは朝の七時半近くから学校へ来て「ピーチク・パーチク」歌っています。

六月三日に一次予選、十四日に二次予選、文化祭第二日目、六月二十日に決勝でした。今年の課題曲は「どっこ沼」という楽しい歌で、楽譜はだいが前にくれました。素早く練習にはいるクラス、「まあええやん」と妥協して一次予選一週間前まで何もしないクラスなどさまざまです。それでも二、三日前には、学校中が目の色変えて、歌っています。そして本番。今年はマナーも減点の対象となるので行儀よく（中には舞台へ上かってポケーとしていた人もいました）が

!?）歌い上げます。この予選で28クラスの半分が合格、二次予選は自由曲です。これは色々な曲があり聞きごたえがあります。

これでいよいよ、7クラスが決勝進出です。決勝、あの全生徒の前で歌えるのは、ヘタでも感激です。声援が飛ぶし、ホント（わからない人は一度頑張って下さい）この声援にも負けず勝つのは、クラスの和しかないと痛感しました。では、今年の決勝の結果は次の通りです。

順位	学年	組	曲名
第1位	3	3・4・7	海はなかった
" 2 "	3	2・8・9	海のおい
" 3 "	2	2	航海

水泳訓練と水泳大会

七月。太陽は輝きを増し、私達にとってはプールの季節となるころに、大手前新一年生恒例行事とも言える水泳訓練というものがあります。

この水泳訓練と呼ばれるのは、服部緑地内プール（広々としていて、緑に囲まれています）で、約一週間行なわれる。泳ぎの上達はもちろんのことですが、それ以外にも、体力増進・精神力の強化といったものをもまた、含んでいる行事であります。内容は、授業中に、「何m泳げるか。泳ぎのフォームはどうか。」などによって、まずABC Dの四つの班に分け、それぞれの班で、授業形式がとられるわけです。もちろん、講師は、体育の諸先生方でしたが、ときどき、私達のプールサイド（注・筆者はCでありました。あしからず）

には、数学の先生などもらってました。

この訓練、なかなか苦しく、つらいものであります（おどかしではないですよ）。ですが、この訓練によって、水というものに親しみ、各自の目標に向かって、がんばるという点では、何よりもの絶好のチャンスなので、ぜひ、精いっぱい、泳いできて下さい。

さて、九月になると、これもまた恒例の、今度は全学年を通じての水泳大会があります。この水泳大会は、クラス対抗戦で、種目も、個人戦のみならず、リレー、メドレーなどがあって、クラスの中で、団結が生まれる大会でもあります。まあ、水泳の得意の人やそうでない人も、夏を楽しみに待っていて下さい！

体育大会

九月二十二日(木)、曇り一時雨のち晴れ。まあまあ天気でしたが、雨が降ってきたときはどうなるものかと。しかしながら昼から晴れ。皆、一生懸命走る、走る、走る!!（あきらめて歩く人も!?）

トラック競技も白熱。やっぱり個人競技よりリレーの時の方が見てる方も興奮。ワァーと大歓声。自分のクラスが前に走ってくると掛布コールに似た大合唱も。走ってる方も「あっ、オレの名が呼ばれてる。ガン巴拉ナ。」と必死に走りまくる。

リレーシオン競技はとても面白かった。特に印象強かったのは女子の棒引きと三年生女子の競技とだった。前者は女子のエゴイズム（あー、ウーマン・リブ怖い!!）がすごい。負けていても棒に死にもの狂いでしがみつく者も。後者はさすが三年生、運動不足か、ほとんどの女子、うさぎ跳びの後走れず、コロコロと。

応援も例年のようににぎやかでのばりがたくさん立った。しかし、今年は応援合戦がなかったのもう一つといった感じ。では最後に今年の結果を。

競技の部		応援の部	
第1位	2の9	最優秀	2の8
" 2 "	3の2	優秀	3の3
" 3 "	3の3		3の7
" 4 "	2の7		

文化クラブ発表会

去る11月12日(土)午後1時15分から第1回文化クラブ発表会開催。文化クラブ発表会がなぜできたかと申しますと、行事変更により、毎年4月に行なわれていた自治会祭が廃止されるのと引きかえに各文化クラブからの希望で「秋ぐらいいな」とか「せえ」という声も高まり、この発表会ができたのです。

今度の発表には6クラブ3同好会が腕をきいあって、舞台・展示に活躍。まず、講堂では演劇部の創作劇「幸福の花園」、落研の落語三題、ブラバンの演奏、音楽室では軽音の演奏、物理教室ではSFのスライド上映、美術室では美術部の名画、209教室ではESS、309教室では地歴、全会場で文芸部の文集配布。

今度の発表会を見ると、各部員が意気込んで活動を行っていたが、土曜日の放課後ということもあり、舞台・展示の観客が少なかったと思う。特に講堂では観客がわずか五十〜六十人程。だんだん増えてやっと思人程。身内だけの公演という感じ。これではやる方

としても少し意気消沈である。ホント講堂はやらん劇場みたいだった。来年からは土・日以外の日で全クラブ一斉参加してもらいたい！

これ、やったものの切実な願い。自治会よ頑張ってくれ！

マラソン大会

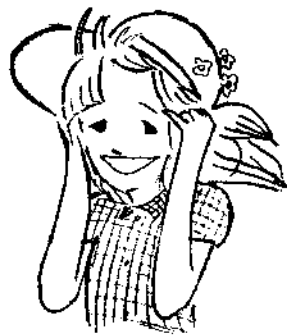
毎年2月のくそ寒い日に、大手前の二大苦業の一つであるマラソン大会。男子は大阪城大外1周と半ホド、女子は同じところを1周ダケ。いつもマラソン大会前になると、かぜひきをめされます方続出。体研の先生方は疑いの目も。なぜうちの学校の前にこんな最高かつ長いマラソン用の庭があるの。大阪城はアベック用で結構。大阪冬の陣あたりがおこって大阪城崩壊を叫ぶ声もちらはら。では去年のマラソン大会を振り返って感想を。

——とにかく感想は完走できたことであります。ゴールの一時は無我の境地に達していたのであります。

——I君がおしとやかに「うちまた」で走るのが印象的だった。

——感想なんか全くない。ただ苦しくて苦しくて、考えるひまななかなかった。走ることのみだった。でも女子が男子のゴールする顔を見ようと並んでいたのには困った。

——皆の力強さには全くもって驚いた。女の人の恐ろしさ（自分も含め!?）を知ったようだった。男子の疲れ切った顔を見るのは楽しかった！



随 想

夫のため子のため世の人のため

大倉清校長先生

秋更けて夫の仕事の果てざるを 我は黙して綿入れを縫う

夫は昼間は偉大の講義に行くが、家の者が寝静まった夜中になると頭がさえてくるのかひらめいた数式をノートに書きつける。突然電灯が明るくなりびっくりして泣き出した赤ん坊を抱いて、寝室から一番離れた部屋へ連れて行き明りが消えるまで妻は待つ。出張先の夫から「こんど帰ったら今までのように勉強ばかりしないで少しは二人の時間も作ろう」と書いてきた便りを、淋しくなると寝しなにそっと取り出して読んだ。北海道の学会で肺炎を病んだ夫の帰りを大阪駅へ迎えに行った時、昼食の時間がとくに過ぎてゐるのに「きみと一緒に食べようと思って」と、駅弁を二つ買っていてくれたのを見て胸がいっぱいになり嬉し涙をこぼした。嫁いで間もない頃、中間子理論に没頭していた夫の思い出をスミさんは語る。

競争率八倍の大手前高女に入学したスミさんは、思いやりのある優しい人柄を「お湯さんお湯さん」と級友の誰からも愛された。三年生の七月、盲腸炎で痛む腹に氷嚢をくくりつけて学期末試験を受

け通すしんの強さもあった。優等で卒業したスミさんは進学を希望したが、花嫁修業が第一と父母は許さなかった。卒業式の翌日から朝六時に起され部屋の掃除、台所の手伝いをし、朝食後は母と向い合つて裁縫のけいこに励んだ。病院長の父はこの子をきびしくしつけるとともにこのうえなく愛した。スミさんのためにお茶、生け花、料理、長唄、舞踊、南曲等の勉強にそれぞれ大阪一の先生を頼んだ。昭和七年正月、二十二才のスミさんは秀樹氏と見合いし、氣に入られて四月に結婚した。間もなく生まれた二人の男の子をかかえて夫に仕えた時期の様子は、冒頭に掲げた歌が示している。「夫を、家庭を大切にするのが女のつとめ」との父の教えを一生の生き甲斐とした。

昭和十八年、文化勲章を授与された博士は京大と東大の兼任であるうえにあちこちの大学から講演依頼も多く、過労の連続で健康はすぐれなかった。第二次大戦が次第にきびしくなり食糧事情もひどくなつた頃、ようやくにして手に入れたパンや卵を夫の研究室へ届けた。夫は誰が持ってきたかも知らずそのパンをかじりながら寸暇を惜しんで研究に没頭した。昭和二十四年、四十二才の夫はノーベル賞を受けた。その後、五年にわたる滞米生活、夫の身のまわりのこと、学者仲間とのつきあい、子どもの養育、スミさんは苦勞と楽しさが交錯しながら多忙な日々を送った。

そして去年、ガンに侵された夫を不眠不休で看護したスミさんは心配と過労のため体重が七キロも減り、真白になった髪を見た美容院のママさんは泣いた。奇蹟的に再起した博士が出席できるようにと京都を会場として開かれた世界連邦会議の開会式に、車椅子で挨拶する夫を見守りつつスミさんはそっと目頭を押えた。今スミさん

は夫とともに核兵器のない世界連邦をめざして後半生を平和運動に捧げている。夫のため、子のため、世の人のため生き抜いた献身的な妻、湯川スミさんの自伝「苦楽の園」はかざり気なく率直に六十余年の日々を描いている。校長室に掲げられている「二人同心其利断金 同心之言其臭如蘭」（易経のことばで、本校同窓会金蘭会の名称の語源）という湯川博士の書を見上げながらご夫妻のご健康を心から祈っている。

講談社学術文庫のすすめ

多賀谷 鑑 先生

先日古本屋の主人と話をする機会があった。この人達は社会の裏面に通じているものだが、話がたまたま読書ということになって、「最近の学生さんは本を読まなくなりましたなあ。」という。いやそんなことはない、旭屋でも紀伊国屋でも学生で一ぱいだよという。「これはという本は高価だし、絶版となっているものも多い。昔はそんな種類の出物をよく頼みにきて、いざ入ったとなると借金してでも買ったものです。高価すぎてあまり気の毒だから勉強させてもらうと、ほんとうに嬉しそうにその本をなでながら帰っていきました。」という。まあ世代のちがひもあるからと笑ってすませたが、きびしい見方をしていると感心したのである。

読書の効用について今更でもないが、知的好奇心の満足というのが第一であろう。学生時代、偶然に手にした一冊の本がその人の一

生をきめることがよくある。「人との出あい」が大切なように「本との出あい」もそれに劣らず大切である。ところで高校生の諸君には精緻な論理で組み立てた名著より、細部は大まかであっても豊かな想像力を駆使して広々とした世界に読者を誘うものが第一である。最近次々と発刊されている講談社の学術文庫は、その意味で大変すぐれていると思われる。内容が豊富で価格の安いのが何より有難い。その学術文庫から思いつくままに三冊の本をあげてみよう。

第一は朝永振一郎先生の「わが師、わが友」である。これを最初にあげる理由は、学問の研究で「自由」がいかに大切であるかをしみじみと感じさせてもらえるからである。先生は「自由」について説教めいたことは一切なさらないが、自らの学問の歩みをたんとと叙述されることによって、学問の自由の尊さを谷間の岩清水のような清冽さで読者の胸にきざみこまれる。どの世界でも創造の苦しみは大変なものであるが、その苦闘の中から豊潤な美酒が醸成される過程もみごとにえがきだされている。若い読者が将来同じ苦しみに落ちこんだとき、この本は何よりの慰めとなるだろう。若き日の朝永先生が暗黒の毎日を送られていた折に、恩師の仁科先生からの励ましの手紙に涙されるあたり、久しぶりに胸の熱くなるのを覚えて。一ページ、一ページを大切に味わいたい一冊である。

次に内藤湖南先生の「日本文化史研究上下」をあげよう。高校生の諸君はまず下巻の「応仁の乱」からはじめるとよい。透徹した史眼というのはこのことをいうのだろう。二十歳前後の頃、トインビーの「試練に立つ文明」を読んで魂を震撼させられた記憶をもつが、応仁の乱はそれ以上に強烈である。「大体歴史というものは、ある一面から申しますと、いつでも下級人民がだんだん向上発展して

ゆく記録であるといつてよいのでありまして……」「大体今日の日本を知るために、日本の歴史を研究するには、古代の歴史を研究する必要は殆どありません。応仁の乱以後の歴史を知っておつたらそれでたくさんです。」この正鵠さはこれから先も不変なものの一つであろう。

第三は笠信太郎氏の「論理について」である。自分の好みをいえば、この中の「死と生」により強くひかれるが、若い読者はこの章に興味をもてないであろうから、「知恵の構造」を熟読されることをすすめる。難解な文章であるがくりかえし読むうちに著者の意図がだんだん明瞭な形となってあらわれてくる。これからの人生を歩むにあたって、これだけのことを知って進むのと知らないでいるのでは、大変なちがいができると断言してよろしい。この本は若い人々にとって気の重い一冊であろうが、その難解さの中に貴重な宝がひそんでいる。全力を尽してその宝をつかみとってほしいのである。他にも今西錦司「山岳省察」、高木市之助「湖畔」、森有正「思索と経験をめぐる」などすぐれた本がたくさんある。興味をひく一冊から読みはじめることを切に望む。



冬の旅と私

中塚五郎先生

修学旅行のバスの中で、あるゲームの結果、生徒から五つの質問を受けなければならぬ破目におちいり、その中の一つに「先生の趣味は何ですか」というのがあった。そのときは突然のことですごく考える余裕もなく「シューベルトの音楽、特に冬の旅」と答えたが、あとで考えてみると趣味というのはいくらなんでものだらうかと気になって仕方がない。しかし、シューベルトの音楽、特に「冬の旅」ほど、ある時期の私をなぐさめてくれたものはない。久しぶりにその名前を口にした機会になつかしい「冬の旅」の思い出をのべてみたい。

よく戦前と戦後の教育の最も異なる点は芸術教育、特に音楽教育にあるといわれる。私の経験をふり返ってみてもたしかにその通りである。私が習ったのは音楽ではなくて口うつしにおぼえさせられた唱歌であり、それも小学校の間だけだった。したがって敗戦後、文化国家ということがよくいわれ、私自身も夢中で音楽を聞くようになってからも、音楽そのものにふれるのではなく、文字を通じて音楽についての知識を得ようとしていた。私がまず聞いたのはベートーベンの「運命」であり「英雄」であり、シューベルトの「未完成」であり、チャイコフスキーの「悲愴」であった。つまり何かのエピソードがあり、何か標題のついている曲を文学を理解するように理解しようとしたのである。

敗戦後数年たって、大手前につとめるようになった頃私も所謂ス

タンダードな名曲のレコードは一通り揃え、何度もくり返し聞くようになったが、そんなときにもふと自分はあくまでも音楽を教養として聞こうとしていることに気付くことがあった。音楽についての知識は豊富になっても、音楽に陶醉し、音楽に感動するようなことはほとんどなかったのである。

ちょうどその頃、私はある人から一枚のレコードのプレゼントをいただいた。現在のようなLPではなく、SP盤とよばれた昔のレコードである。吹込まれていた曲は「冬の旅」の第一曲

「おやすみ」と最終曲「辻音楽師」とであった。はじめの中はドイツ語の辞書を片手に何とか

歌詞を理解しながら聞いているうちに、いままで感じたことのなかった感動を覚えたのである。私はその頃の給料全部をはたいて「冬の旅」の全曲を買った。そして文字通り盤がすり切れるまで毎日毎日くり返し聞いた。いや、聞かなければどうにもならないようなその頃の気持だった。

「冬の旅」は恋に破れた若者が恋人の家の扉におやすみの一言を書き残して旅に出る所から始まる。恋人がめざめたならば自分の心を知ってくれるだろうとはかない望みを残しながら。そして氷と雪の荒野を恋人を思いつつさまよう若者の心を、シューベルトは自らも心からの共感をもって歌いあげている。シューベルトは友人に「冬の旅」は自分が今までに作曲したどの曲よりも好きだ。君たちもきっと好きになってくれるだろうと語っている。教職について二、



三年目だったその頃の私の心は生徒を教える喜びと、自分の手の届かぬ遠くにある生徒の心に対する絶望との間をゆれ動いていた。そんな若い日の私の心を「冬の旅」ほどよく共鳴し、また慰めてくれたものはない。

ちょうどその頃、私の持っていた「冬の旅」を歌ったドイツ人ゲルハルト・ヒツシュが来日した。もう引退間際でそれほど評判にもならなかったがサンケイ会館での演奏会の日、一時間ほど前に行った私は偶然エレベーターでヒツシュ夫妻と一しょになった。思わず頭を下げた私に彼は「ダンケシェーン」とほほえんでくれた。この日の演奏会で私の眼から涙があふれた。音楽会でこんなに泣いたことは後にも先にもこの日限りである。この日は家には私は歩いて帰ったように思う。

近頃、私は「冬の旅」をあまり聞かなくなった。しかし三年に一度、私の担任した生徒の卒業式の日、全曲を聞くことにしている。生徒の卒業していったあとの心の空虚さを「冬の旅」はやはりなくさめてくれるからである。来年の三月はきつとまた「冬の旅」全曲を聞くことだろうと思っている。

クラス紹介

一年一組

わが一年一組の最も大きな特色のひとつに、際立った特色がないと云うことが先ず挙げられます。これは冗談でも何でも無い、何日かを一組で過せば、この事を納得しない人はまあいないでしょう。

然し、そうはいうものの一組には又非常に個性に富んだ一面のない事もないのです。具体的にいちいち採り上げては枚数にいとまがない位ですが、ともかくそういう一種異様なクラスではあるのです。ところが、ここで一つ嫌味を言えば、一組というクラスは何をやっても成功すると云う事がない。と云っても或程度の線までは行くのです。これこそ正に悪い意味の中庸ではないでしょうか。そしてこれらすべては、おそらく一組全体としてのまとまりのなさに由来すると言えましょう。この事はみんなのクラスへの関心を弱めるばかりでなく、生活のマンネリ化をもたらし、危険です。

と言う訳で、専ら苦言めいた事を書いてしまいましたが、そうかと言って一組を、たゞおとなしいだけのしみったれたクラスだと思いきひのはよくない、どころが大間違いで、寧ろ一組程普通の意味に於いて活発なクラスもそう多くないのではないか、と思える瞬間が、往々にしてあるのです。

ずいぶん毀誉褒貶の著るしい、偏見に満ちた文章になってしまつたが、それでも僕にこんな書き方しか許さない一組の複雑な性格を

あわせて考えて下さい。この中から一つや二つ抽象したところで何にもなりはしません。おそらく僕達は、一組というクラスと一緒にいながら、一組の光芒をたゞ手を拱いて見送り続けるだけでしょう。

一年二組

前回のスプリングから考えるに、私の書くこのクラス紹介は、早々にして二番目に登場してしまう。さらに考えるに、これを読む読者のほとんどが自分のクラスの次の次、即ち三番目に読むであろう。その上さらに考えさせられるに、このあたりまでは読者も神聖なる感動をもって読んでくれるのではないだろうか（反語）。

前おきが長過ぎて大変失礼いたしました。ではまず、ごまかすことの出来ない事実から御紹介いたしましょう。バレーボール大会、女子は大健闘で準優勝、男子は一回速敗退。コーラス大会、私たちの音楽的水準は高く、一般の俗人には理解されず、涙をのんでひきさが。水泳大会、個人では大活躍でしたがクラスでは一歩及ばず。体育祭、まずまず中位。とまあ、こんな具合であります。ここまできて話が行き詰まってしまいました。なぜなら個人的には書く事もずいぶんあるのですが「個人名は出さな」という先輩の言葉により私はそれを忠実に守る覚悟なのです。即ち二組は成績もまずまず平均という全体的におとなしいクラスなのです。では、こういうクラスを運良く？受け持たれた近松淳一先生を少しばかり御紹介いたしましょう。一口で言う、性格温厚なヒューマニスト。そしてあの魅力的なハスキーな声は全女性憧れの的。先生にかかると有名人の多数が友人か教え子になってしまうのです。

一年三組

わが一年三組のことについて何か、と筆者は必死になって考えたのだが、正直なところ現状があまりよくないため、書きにくい。それは、今までの数多い行事からでもよくわかる。

春の校外教授は慣れていなくてあまり印象に残っていないのだが、文化祭のバザーはあまりにも早く売れすぎたため午前中に店じまいをするようなあたりから三組らしさが現われてきた。速足で行き先が決まらないことなど決定的だ。

また、球技大会やコーラス大会、体育大会の成績は、担任の先生が「一回ぐらい入賞しーや。」とおっしゃられたことばを見事に裏切って、いまだに入賞どころか、最下位に近いような大会成績。そのうえ、成績面では、一言「どん底クラス！」と某先生。

しかし、そんな、ともすればどうしようもないように思われる三組のよいところは、おもしろく、明るいくところである。遊びにかけるときのみなの顔は、充実感にあふれている。遠足や見学会のおりには、男子は野球やサッカー、女子はかんけり、探偵ごっこ、ボールを追ひ、おにに追われることに全存在を集中している。また、ものまねなど独自の芸の道に徹する人もいる。

要するに、「笑」を追求し、個性の強い人の多いクラスなのだ。他のクラスの人の出入りが多いのも、三組の特徴だ。

まだ、あと四カ月以上ある。前期、後期と変わらず、一年間熱意に燃えがまんばっている大変ユニークな会長を中心として、わが栄光（？）の三組のために、これからがんばろう！！

一年四組

クラス紹介の文を書くためにペンをとる。我がクラスは得体の知らないクラスである。入学して三カ月ぐらいからようやくまとまりはじめたのだが、何となく不可解なところが残る四組。さてこんなクラスの特長。ある日、某先生が「四組はおとなしく教えやすい。」とおっしゃったそう。そうかと思うと、「いつまで騒いどるか。」

もう少し静かにせい。」と怒鳴られる先生。先生によって妖怪変化のように態度が変わるのである。また、頭の切りかえをするのが弱く、文化祭などでは、三週間たっても、まだ浮かれているような状態なのだ。教科書を借りるのが最も上手なもの、おそらく四組だろう。

しかし、このクラスのよいところは、一致団結すること、数々の校内大会では、まさに総力をあげて戦った。口では何やかやといっている、いざとなるとスーッとひとところにあつまって行動するのである。つまりいいやつばかりなのだ。ちょっと残念だったことは、男子と女子の境界線がわりとはっきりついていたこと、HR活動に少し非協力的であること。

よくいえば無邪気で気のいい、悪くいえば始末におえない四組の大ボスは小野先生。この素晴らしき大数学者の教え子である我々がどれほど数学が好きであるかということは、お察しいただきたい。

クラス仲間として、最高といえる現在の四組があと五カ月足らずで地上から消えてなくなるかと思うと、まことに残念であるが（一部安堵の声）、運命にはさからえないので、ここにちりちりとなるであろう我が最傑たちの前途を祝して、ペンを置く。

一年五組

我が一年五組の教室は、御存知の通り音楽教室の隣りにあります。といえ、そう授業が始まるやいなや、隣りでは発声練習が始まり歌や笛の音が我々の耳に麗しく響いてきます。時にはそれがトランペットであり、また時にはそれが、なんとオペラなのです。最近はその輪をかけるように、すぐ奥下で新校舎の建設が始まりました。さて、我々のクラスを評して、生物の中来田先生のおっしゃるには、「このクラス来ると、みんなニコニコしてますネエー。これだからこの隔離された教室で耐えられるんですネエー」。他の先生方も、明るい明るいとおっしゃってくれます。「かしこい」といってくれないのが、気になります……。

しかし、我々はこれらにもめげず、がんばっています。まだまだ若い(?)庭野先生を中心にして、みんなは活気に満ちています。一学期のコーラス大会では、一年生ながら、見事に六位入賞を果たしました(毎日音楽になじんでるからやろか?)。張り切り過ぎて、はめをはずしてしまふこともしばしばありますが、それもまた、このクラスの良いところだと思います。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ

歌ニモ騒音ニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

欲ガ強ク 決シテ負ケズ

イツモ大声デ笑ッテイル

(宮沢賢治「雨ニモマケズ」より借用)

一年六組

原稿用紙に向う。何と書けばいいのだろう。ことばが見つからない。溜息をつき、無為に過ぎてゆく時間を気にする。「クラス紹介なんだからそんなに気取ることないよ。」と誘惑され、あわてて頭を横に振る。

出会いから八カ月、クラスの雰囲気がどんなものであるかわかっているつもりでも、なかなかことばでは言い表せない。

春の日の昼下りの授業風景、都会の雑沓、軽やかなアコースティックギターのメロディ、電子楽器の音が長く連なる幻想的なプロダクション・サウンド……さまざまな光景や音声が交錯する。無邪気なようでちゃっかりしていて、さめているようでどこか少女趣味的な甘さのある……。

球技、体育大会等の成績は常に下位から数えた方がずっと早く、学業面においてもこれは同じだった。また、学級活動等も不活発で、全体的なつながりというものが薄かった。

八カ月前、僕たちは偶然十両編成の特急列車の六両目に乗り合わせた。互いに見知らぬ旅人同士であった。そして今、グループ内でのつながりは強いにせよ、全体的なまとまりはなく、そういう点、まだひとりひとは孤独であるかもしれない。

何かに熱中し、皆といっしょにその喜びをわかちあいたかったが、何かがそれを押えていた。また、お互いの強すぎる個性が障壁になっていたのかもしれない。

紙面が尽きた。ひとりひとりが描いた軌跡はすべての流れを支配する闇の中に消えてゆくことだろう。

一年七組

わが7組は「楽しい」の一語に尽きるクラスで、教室から笑い声が絶えたことはなく、雰囲気はとてまごやかです。というのも、わがクラスには大手前という「芸人」が多く、私たちを笑わせてくれるため、ギャグありだじゃれありの学校生活は、笑いで満ちあふれています。これは、私たちが他のクラスに誇れる、恐らく唯一のものでしょう。そしてまた7組の特徴に、その行動力があげられます。体育祭でも球技大会でも懸命に練習し、目標に向かって一心不乱につき進む、いわば猪突猛進型のクラスです。こんな個性の強いクラスを受け持った担任の先生はたいへんでしょう。言い忘れましたが私たちの担任は「エクボ」でおなじみの、敏こと田中先生です。エネルギッシュなクラスにその熱気を受けとめてくれる若い先生（？才、独身なので年令は明かせません）、この組み合わせであったからこそ、私たちはここまでやってこれたのかも知れません。とにかく2年になって組替えをするのが惜しいようなクラスです。えー突然ですがここで、七組を代表して、会長に一言お願いします。「まゝそのー」会長がこんな調子ですから、休み時間などともう大変、とぐろ虫が飛んだり、しらせ虫が地をはったり支離滅裂で、よくこんなクラスにいて気が狂わないかと、わがことながら感心しています。そして皆が、自分だけはまともだと思っていて、他人はみんな少しおかしいと思っているので（かくいう私もその部類なのです）、他人に合わせて低級な話題が多くなるのです。このため7組は書くことが多いのですが、スプリングコードに触れて、せっかく作ったスプリングが発行禁止になると困るので、このへんでやめ

ておきます。最後に一言「たたりじゃー、7組のたたりじゃー」。

一年八組

我が八組についてということだが、さて、何を書けばいいのだろうか。あまりにも話題の多いクラスなので、何から書き始めるべきかわからないのだ。しかし八組を表す言葉は、これしかないようだ「団結」。この2文字が八組のすべてである。何事をするにも、必ず一人、リーダーシップをとる子が現れ、結果はどうであろうとも、すべてに完全燃焼するのだ。そして授業中、休み時間ともに笑いが絶えないのも八組の特徴であろう。しかしその反面、八組のただ一つの欠点は「すずめの巣」であることなのだ。つまり、騒がしすぎるのである。たぶん、エネルギーのあり余っている人が多いからではないだろうか。

八組を語ろうと思えば、やはり、担任の中村先生をぬきにしては語りきれないだろう。先生は、走り出したら止まらない私達を、いつも一歩下がって見守って下さっている。また、先生の提案で実行されている「五分間スピーチ」も八組の大きな特徴であろう。「五分間スピーチ」というのは、朝のH・Rのとき一人が前へ出て話をするのである。話しじょうずの子も、話しべたの子も、みんなである。話題は、自由。「五分」というのは、短いようで、案外、長いものである。「五分間スピーチ」の利点は、話し手の今まで気づかなかった面が見えてくることにあると思う。この「五分間スピーチ」も八組の「団結」に大いに役立っているのである。最後になつたが是非とも書かねばならないことが残っている。それは、「八組

は最高のクラスだ。」ということである。

一年九組

九組。男子25人女子21人合計46人の大手前生らしからぬ人間がより集まった最も大手前生らしいクラスである。実にユニークで、みな恥も外聞もなく各人の個性をむき出しにしている。なんと一言も、シラケないところがよいのではないだろうか。絶えずジョークが突発し、笑いが絶えない。世間では、このようなクラスは勉強がおろそかにされていると思われがちだが、なんのなんの、秀才、鬼才と、平凡の中に非凡を見出し人間がずらりと勢揃い。全く常識では考えられないようなクラスであろう。そう、その通り常識では考えられないようなクラスなのだ。さらにスポーツ面ではどうかと言うと、ここでも素晴らしい成績を修めている。まず水泳大会では、なく、学年優勝、次に体育大会でも苦戦ながら学年優勝した。

どうだろうこの素晴らしいクラスは、君たちわかるかね？ 筆者が思うにまさにスパーマン・スパーウーマンの集合だよ。

女の子？ みんなやさしい娘だよ。彼女たちの笑い声はクラスの雰囲気をも明るくするね。

男の子？ みんな楽しいやつだよ。天下太平で心が広いね。

担任？ 黒田って名の先生で英語を教えていらっしやるよ。のん気で冗談のきく先生だよ。一時間に一回は私たちを笑わしてくるね。

ま、九組を紹介するとこんなものだが、いかにスパーマンでも成功ばかりしたのではない。たまには失敗もあったが、それをいつまでもくよくよせず笑ってごまかせるところがこのクラスの一番い

いところではないかと筆者は考えるのだ。これからも前途有望な彼等は、失敗にまげず、絶えず前進して行くだろう。

一年十組

はつきり言って一年十組は、まとまりが少なかった。コーラス大会や校内大会などでも一人一人の技量は、劣っていないと思うのだが今一つ団結力で他クラスに劣って下位であがいていた。

時は、九月二十二日、体育大会である。今までの屈辱をはらすどころか、もはや体育大会に参加する気もないのではないかと思われる開会式であった。しかし、偶然かはたまたまの本当の実力か序盤戦で我十組は、二年、三年を交えても一位であった。このニュースを聞いて「どうせ最下位だ。がんばってもしょうがない。」などという気持ちで吹き飛んだのか関古鳥の鳴いていた応援席にも活気があふれ始めた。また、競技にも熱がこもり、得点板を必死ににらみ、シーソーゲームに一喜一憂した決勝戦に一人も出ていない弱みのため後半戦で二年、三年に追いぬかれ、入賞が果たせなかったものの学年では上位であった。体育大会の終わってのち、「オリジン」と中村良一教諭（敬意を表して）にも、懸命になった時の十組は素晴らしいとはめられ、また担任の杉野先生も、この事によって安心されたらしくて、気持ち良くほめて下さった。

体育大会から、かなり日数のたった今、あの団結、あの興奮はも早忘れられたかの様であるが、その底では、今でも熱い血が脈々と流れているはずである。一旦、何かあれば、熱い血は再び表面に吹き出して今度こそは、最初から一丸となって行事に取り組むことで

あろう。

もし、行事がもうないとしても、一人一人の持つ熱い血は、二年組の原動力として、一年十組が完全には果たし得なかったクラスの団結をすみやかに実現する事であろう。

二年一組



二年一組の紹介を書け！という御上からの御達しで、そういう物を書かねばならない。僕は意固地であるから断わったかも知れないのだが、丁度テストから解放された時でもあり、責任もあるので書くことになってしまった。

まず、一組を語るに忘れられないのは中川先生である。書道選択以外の人はあまり縁がないかも知れないが、一般に、堅く、尊敬を持ち、正義感に満ち溢れていると思われるらしい。多数は必ずしも真ならずか？ 本当は、若く、楽天的で、気楽であり、マンガが大好き、という先生なのである。だが、そんな中にも「限度」というものを見きわめておられ、厳しい一面も持っておられるので、人目にはそう映るのであろう。

そんな先生の性格が、そのままクラスの性格を反映しているようだ。享乐的？で愉快だが、一面、校内大会などにおける真面目さ、勤勉さ、そして団結力にも目を見はるものがある。実際、コーラス大会では、全員書道選択であるというハンディを乗り越えて、五分の大曲をこなし、決勝まで進んだことは御存知の通りであり、スポーツ大会の練習や、文化祭の準備も、皆、一生懸命やっている。つまり、クラス内部に派閥みたいなものがなく、一つに良くまとまっ

ているのである。その団結力が時には度を越すこともあるが、それだけ元気であるには違いない。

まだまだ書きたいことは多くあるのだが、大体どんなクラスか理解して頂けたかと思う。とにかく底ぬけに楽しいクラスである。

二年二組

文化委員でない私が海賊の子孫であるというK氏に拝み倒されて、クラス紹介なる恐いものを書かねばならないはめになってしまった。

二年二組、内部の実情を知っている者にとっては身の毛もよだつほど楽しい(狂気だという説有り)クラスである。この一年間を通して、数々のギャグ等も生まれたが、それらがほとんど内部の人間にしか理解できないというのも特徴である。まあ、見方によってはクラスの殻に閉じこもっているということも言えないではないかも知れないが、筆者など毎日、寄席(一説には動物園)へ通っているような気分で登校してくるのだから、笑いのMAXに達した者としては仕方がない。ところで二組には動物園の名に恥じない程、芸人や役者が揃っている。O中華料理店でFALSE THEHILKIPで餃子を食べ、TV出演したT氏、ロッカーに対する幾多の虐待にもひたすら耐え抜いたO氏、ガンダーラ地方から来阪してきて仏教の布教に励むN氏、そしてプレスリリーチャンドラグプタという等式で世の中の定義を変えた有名人もいる。また、「わかるな」の三段活用をはじめ、世の中ゼニ・コネ・ウラの三大法則を世間に広め、ある授業中だけは先生に異常な程積極的に質問して授業を盛り

あげるなど教育にも貢献している。校内大会ではブービー賞に輝くことに生きがいを感じ、時には学年のアンカーという重要な役目をもったりもした。

男女の中も猿人とN嬢を筆頭として非常に睦しく、宴会事の好きな躁騒病の者の集合のようなクラス二組に対して筆者は拍手を送りつつ（実際は疲れたので）ENDとします。

二年三組

四月春風の中、ここ403号教室で、佐野先生という大きな林檎の木に、45個の小さなつぼみがついた。恥ずかしそうなつぼみ達は、白や淡紅色や淡紫色にその身を染めて、暖かな春の日射しの中へ飛び出した。ホームルームを通して、クラブ活動を通して、そして、色々な楽しい学級活動を通して、お互いの心を理解しあった。

笑いの絶えた時なんてあっただろうか。いつも後ろの黒板に書かれてある楽しいラクガキは、今も書き続けられている。

つぼみ達は、大きな木の緑の葉に見守られ、しっかりと枝に結ばれて、送られてくる養分を摂取した。楽しげに日を浴びつぼみを少しずつほころばせて、美しい花を咲かせた。皆はうれしくて、歌を歌い、お化け屋敷も皆の力で作った。そのゆかいさや忙しさを、皆は今も思い出すことだろう。春に受けきれなかったバレーボールの代わりに、泳ぎ、走り、そして声援を送った。汗にまみれ、目を輝かせ、ガッチリとスクラムを組んで、多くの大会に、精一杯挑戦した。学習面でも、仲間と共につまずくことなく前進し続け、現在に至っている。大きな木から私達に送られる愛情と仲間同志の友情

とによって、私達は増々大きく成長していった。秋風の中、実をつけた私達は、日ごとに色を深め、実をふくらませて、それぞれの目標を見つけ出そうとしているようだ。その実は、はちきれんばかりの若さだ。赤く輝き、その色の鮮やかさで人を驚かす。

大きな木の45個の実、新しく広がる世界へ飛び出す日のために、その実の甘さをますます、増すことだろう。

二年四組

調査書 調査内容「二年四組」

「我クラスの担任は広田先生である。」と紹介するよりは、愛称として親しまれている「ポッコリ」と言った方がわかりやすいであろう。並みはずれた頭脳と視力とユーモラスな話しぶり。50分の魔の数学の授業もあったという間にすんでしまう（こともしばしばある）

よく授業中先生の故郷の四国の話が出てくるたびに、クラスは爆笑のうずになる。でも余談ばかりではない。その日の授業のポイントはもちろんとわかるから不思議。ポッコリ（失礼！）先生は歌もうまい！

あふれる熱意と父親のような包容力をもつポッコリ先生である。

クラスの印象——女子が強くて男子が怠慢である。これは全クラスに共通していることかもしれないが四組では特にない。校内大会の対戦成績がそれを如実に物語っている。女子は球技大会に於て優勝という優勝を残らずさらわんと欲し、中止されたラグビー大会にまで出場しそうな勢いだ、男子はというと、かろうじてバレーボール大会で準優勝し、水泳大会に於ては優勝しかけて

いた女子の足を引っぱる程度のもだった。男女間の仲は悪いとは言えないのだが。

クラスが妙に一致団結する時があるが、それは必ず良い目標を持ってではない。教室内では常に笑いが絶えず、授業風景は極めてなごやかであり、このクラスにかかると授業は「楽しい」ものとなるのである。

結論——決して落葉が舞う御堂筋を歩く気分になるようなクラスではない。ある面では絶望的なクラスである。

二年五組

二年五組を語るためには、この人なくして語れない。我が組の担任、中塚五郎先生その人である（通称ゴロウちゃん）。その類いまれなる優しさと、生徒に対する深い愛情とをもって、生徒と接せられるため、組全体の信望を集めていらっしやる。

二年五組は、中塚先生の影響を大きく受けたと言っても過言ではなからう。クラスの和というものが、自然にできているように思える。それも各人のある程度の我慢が必要なものでは決してなくて、クラスの者がお互いに気安く話しかけられる状態なのである。だから生徒間における断絶は、ほとんど起こっていない。実に理想的なクラスである。しかし、そのためか勉学の方は不振であり、また傑出した人物というのも出ていない。そういう点から言えば実に標準的なクラスだとも言える。

二年五組は、その「お人好しクラス」という短所を、「チームワークのよさ」という長所である程度補い、校内球技大会で好成績を

上げた……と記したいところだが実際は、バレーボール大会男子優勝という奇蹟を除いて、成績はすこぶる悪かった。しかし、その反面、文化祭で「夕鶴」を上演し、大好評を得たほか、修学旅行の「ゲーム合戦」で優勝するなど、その文化的水準の高い（あるいは芸人ぞろいという）組の真価を発揮したときもあった。しかし、文化的水準が高いと言っても、コーラス大会では、音楽選択者が多いにもかかわらず、一次予選で落ちてしまった。以上、どうも我が組は真剣な勝負に弱い気がして後々のことが心配だが、勉強や校内大会で好成績を残せなくとも、いつまでも、この幸せなクラスの状態が続いてくれることを願うばかりである。

二年六組

一九七七年度四月の組分け総選挙における、二年六組国会の党派別人数とその簡単な綱領を紹介しておこう。＊漂着民族党3名（いつの頃からか北方或は南方から流れ着き定住した。日本国内の漂着民族のため戦う）。＊日本卑猥党5名（六組の低俗化に貢献する）。＊関西芸人党2名（口述、手ぶりに芸を持つ人々。関西芸能界非認定）。＊シツカリ娘会6名（文字通り男まさりの一面を持つ女性達。女もヤルってことを男子に知覚させるのが目的）。＊新中年クラブ3名（何故かオジサマってカンジ。腰痛には御注意!!）。＊ギャグタッチ党2名（明朗活発。六組の笑顔の草分け的存在）。＊哲人党2名（釈迦よ和尚よ何が故に思想するか?）。＊中性人種党2名（世の中にはまだまだ不思議な生物がおるものじゃ。これは前世の怨念の結集）。＊超人党1名（数年前ベムラーを追って地球にやって来

た彼は、TBSを引退した後大手前に身を隠していた。地球が再び危機に陥った時、又止体を現すであろう。＊トランプ党（六組のトランプ部門担当。最近メンバーを他党に引き抜かれて、純レギュラーは少ないが、一日に一時間一時間半はかかさない）。＊常入党15名（かろうじて彼等の人間らしい行動が六組の秩序を保っている）。議長ーイデコン大先生こと井手昂先生（議員の遅刻に対して特に厳しい反面、延長授業の名手。ヨット、8ミリ、水泳、ドーナツ作りの大家）。年間施行事項ー1バレーボール大会優勝委員会結成（五月）、2文化祭徹夜準備会合（六月）、3水泳大会、体育大会惨敗法案成立（九月十月）、4於修学旅行女性評議委員会総会（十月）、5全国青年会子供会やもめ会決起集会（十月）。以上

二年七組

☆7組三大不思議

。イエスタデイと7組のテーマソングイエスタデイ。7組はコーラス大会において、一次・二次両予選ともベッタで通過。決勝は3位内に入らなかったが、みんな4位だと思ひこむ（これもベッタという声しきり）。しかし、「ポピュラーソングは決勝に出れない」というジnkスを打破、決勝でのギターは大手前史上初。

。鉄のパンツの謎と修学旅行にて、これをはいているという人ありといううわさが広まり、大論争となる。真相はいまだ謎。

。からしれんこんのたたりとなぜか親子三代に涉ってたると言う。

☆7組三大名物

。X教師と七組を語るに彼の存在抜きにはできない。修学旅行にお

ける「変身」もさながら、クラスに多くの信者をもつ大教祖。
。「仕事!」と時として、教卓の上の花のため、黒板が見えない時がある。そんな時、この一言によって、教卓前（仕事席と言われる）に座る人あり、すつくと立ち上がり花瓶を降ろす。

。豪傑笑いと窓外の工事の大音響に負けじと突如大声で笑う人あり。

☆7組三大名言

。「典子さん!」と結婚前の一田先生に熱烈プロポーズする人あり（ゲームラブアタックにて）一田先生一瞬ぐらつく?とか。

。「お立ち寄りの際はよろしく」と自己紹介でみんな自分の家業の宣伝ばかり。不況なんてどこ吹く風?

。「女は男の属物だ!」と熱弁する人あり。女性軍大反論、一田先生困惑の二時間討論会。「結婚した女性の家事につくべきか!」

一言、「わからん組や」

二年八組

思えば、長いようで短く、短いようで長い一年であった。我が2の8……振り返れば、なんと数多くの偉（達）業を残してきたではないか。数多くのヒーローを生み、ついでに数多くの醜態をもさらけ出し、それでもなんとかここまで生き長らえたのは、ひとえに我らの担任平口氏の敏しょう性のおかげと、一同深く感謝しているのです。それではここで、我らの残した足跡をたどってみよう。卯月ー希望に胸をふくらませた始業式。教室へはいるなり視線は女子の顔へ……ヤッタノ何を隠そう2の8は美人揃いなのだ。27日、遠足。ハンゴウスイサンのため翌日、やっとの思いで登校した者数名。卓

月一バレーボール大会。結果はどうであれ、13日の金曜日かつ仏滅の日を無事過ごせたことに感謝（もちろん生けにえになった哀れな若者に）。水無月一移動後初の文化祭。我がクラスは創作劇「一枚の絵」。役者の演技に涙した人がおらんとかいなかったとか……。長月一水泳大会。結果はどうであれ、おぼれ死ななかったことに感謝。体育大会。ここで2の8の本領発揮。羞恥心を捨て、ピシッと気合を入れ、まさしく「歌と踊りと男と女」、結果は当然応援の部最優秀。ここで忘れてならないのは、イス取り優勝で一躍スターになった平口氏である。全員、先生の敏しょう性に最高尊敬……。

締め括りだけは真面目に。とにかく2の8は、厳しくかつ思いやりのある平口御大の下に、まさしく一つの結晶となった、決して壊れることのないクラスである。そう、我が2の8は永遠に不滅です。陰になり日向になって、生徒を思われる平口先生と、未完成ではあるが、各自、人間性豊かな仲間たちを、誰も忘れることはできないだろう。ドモ。

二年九組

2の9を紹介するのに、省略すべからず人物、それは我が担任今西氏であろう。今西氏、字は朝丸、日本史の教師である。師はガリ版をこよなく愛し、又、いかなる漢字をも三ミリ方眼に書き込みうる能力を以って、我がクラスの機関紙「つげないだより」なるものを発足させた人である。その内容は、Y君の支配下にある「出欠表」をはじめ、「成績発表」「討論の広場」など多彩で、師の「つげないだより」にかける情熱は、原稿催促の際のあの微笑に象徴される

のである。また、その情熱は、ついには修学旅行に印刷機を携帯させるまでに至った。その根性に、筆者は唯々驚嘆するのみである。

さて、師の事ばかり書いていても埒が明かないので、次にクラスの過去を振り返ってみると……バレーボール大会・男子6人制優勝。体育大会・優勝。水泳大会・全校第3位——つまり、我がクラスはスポーツ万能ばかり（本当は、そんな人もいる）なのである。ところが反面、数学などは最近まで最下位を誇っていて、活気のある授業風景は現国にしか見られなくなってしまう。文化祭、喫茶茶房里——を開店。この大事業に、9組は一致団結して立ち向かい、保健所のお世話にもならず、見事、大々成功を収めたのであった。修学旅行・クラス対抗ゲーム大会には、M君の女装をはじめ、9組の精鋭を多数送り込んだのだが、結果はN位。しかし、この屈辱は、オリエンテーリング大会における、優勝をはじめとする9組の上位独占によって、はらされたのであった。

最後に、9組に栄光あれ!!

三年一組

おそらく、これから筆者の書きつづるようなクラス紹介は、前代未聞ではあるまいか。筆者にとって小学

校以来のクラスがえて、これほどがっかりしたことにはなかったのだから。ちょうど合格発表と同時に名簿がはりだされたらしいが、ほとんどの人がこのクラスは、と思ったにちがいない。それほどこのクラスの人物は〇〇〇〇ぞろいなのである。ある先生からは（ここで



はあえて名は伏せておく。雰囲気が悪いと、一年間言われ続けたし、筆者自身最後までそう思っていた。

何といつてもクラスの特徴はやる気のなさ、これにつきると思う。まず文化祭、準備はごく少数の人が前日残ったにすぎず、当日はと期待したものの、定刻に集まったのは五、六人という無関心さ。それなら参加しなければよいと筆者は先が見えていたから主張したにもかかわらず、なぜかそれにはほとんどが反対した。この矛盾は今もって筆者にはわからない。次に水泳大会、女子は人数があり余るほどのいるのに延べ八人がでたにすぎず、ほとんどが応援もせずサヨナラ。バスケットやハンドボールの大会は、昼休みにあったにもかかわらず、応援もまばら、選手だけが頑張っていたのがとてもみじめだった。春の遠足はサボリが続出。不思議なことに、秋の遠足に男子が全員参加したことも、なぞの一つ。H・Rなどは、時には23が帰るというような状態。これには担任もびっくり、特に女子がひどい。筆者も時にはサボルこともあるが、行事だけは参加していた。ここまで述べるともう読者にはわかっていただけただろう。筆者が一年間思い続けたのは、担任に対する同情だけである。この場をかきり感謝したい。しかし、こんなクラスでも、住めば都であることを読者に理解していただくのは無理なことかもしれない。

三年二組

☆映画「二組の証明」 原作・政界の小物 協賛・日本独身協会

音楽・ミスター七五三

「42階でございます。ーお、お客さまノ きゃーっ!!」

OMMのエレベーター内で殺人事件が発生した。現場に急行した木村警部は、被害者の顔を見てつぶやいた。「この美しい眼、教養あふれる口もと、これはかの大手前三年二組の住民に違いない。」

「警部、金めのものは何一つ残されていません。ホシはよほどガメツイ奴です。」「うむ。」警部は考えこんだ。「警部ノ」「何だ。」「こんなものを持っていました。」それは一冊の石川啄木詩集であった。

「ゲゲッ!!」このガイ者は社会主義者だったのか!!「なぜかそう叫んだ木村警部は、そこで捜査をぶつ切り打ち切ってしまった。事件は、闇から闇へ葬られるかのように思われた。しかし、捜査は意外な事から再開された。宝塚スターの渡辺義江（通称ギ）が変死体で発見されたのだ。彼、いや彼女もまた三の二出身であった。「三の二が臭いぞ。」そう思った警部は、このクラスを徹底研究した。「なにに、男子14名。但し騎馬戦の時を除く?（どういう意味かな。）水泳大会優勝、体育大会、コーラス大会準優勝。クラスにはタオルを持って「キャンディ・キャンディ」を踊る狸が居る。方言があつて、言葉の終りに「…せないかんでしよ。」という語句がつく。それから、えーと出席簿は中身が賑やかで、その表紙は、某先生によって凶器に使われたらしくかなり傷んでいる。一人、銭に生きる男がいて?ーこれだ! こいつが犯人だ。」即日、Yが緊急逮捕された。Yは告白した。「銭はわしにとって表ワラ帽子だったので。」取調室の窓の外は雪であった。

三年三組

中間考査中の或る日、私は、八時三十五分位に、学校へ着いた。

三階の廊下を通過して教室へ来る時、他の教室と我が教室との違いに気づいた。他の二教室は、頁をめくる音しか聞こえないのに、我が教室の前まで来ると、妙な音が聞こえるのである。話し声には違いないが、ボンボンではなく、チャーチャーなのだ。こんな事はいつものことで、改めて気づくというのも変だが。

とにかく、常口頃から、前で教師が話していなければ、三分の二を占める女性達の騒しいこと甚だしい。憑かれた様な話しぶりだ。各地に点在する男達はその間、白けた顔をし、虚空をにらみ、教師が来、喋り出すのを、唯待つ。

先日某教諭、隣室で授業していたが、たまたま虫の居所が悪かったと見え、突然ヒステリックに怒鳴り込んで来た。その功あつてか、近頃静かだが、果たしていつまで続くやら。

閑話休題。我がクラスは、大会に熱心なクラスである。勝負は、負けるよりは勝った方が楽しいが、いささか熱中の度が過ぎる。お上は、一クラスの和の為の大会だと宣うが、結局、戦いの為に団結することを、ねらっておられる訳だ。そこで、クラス内が没個性的に団結し、クラス内の傲慢な主要勢力に追従するとなると、すぐさま全体主義と結びつける訳ではないが、いささか怖ろしい。

以上の二つに、我がクラスの様々な現象が、集約されているように思うので、あえて他のことは書かなかった。

三年四組

まず47名が最初に顔を合わせた時、まあなんと……だと女の子は思ったのです。女、女、女、すみの2列にしろろしてすわっている

殿方達がお気の毒に思えたものでした。しかし15名の殿方は32名の女の子よりも強いのでありました。「まあなんと元気なことよ。」とどこのクラスよりもおとなしい女の子たちは、いつもそう思っているのです。運動オンチではありますが、勉強の方もそれほどできる方じゃありません。

「文化祭」、演劇部も負けそうなK君、H君……4組のアンティゴネをみて涙を流した人数十人？ それは、衣装係の数人の女子の陰の力が大きいのです。わき役M君の衣装がすばらしくて女子は主観で作ると不満の声もありましたが――まずは大成功。そしてクラス合同のコーラス大会――一位、3組と7組の人達、どうもありがとう。この二クラスの力が大きかったと思うのであります。

秋の遠足では、若草山の頂上で「リッチマン」をやり始めた12人など……。そうそう、結婚の話が好きな女の子たちの事も忘れてはいけません。特にTさん、Mさん。それから政経の時間に、中国の政治制度について話してくれたKさんもありました。あまりめだった人はいませんが（M君、Y君をのぞく）まとまったすばらしいクラスだと私は言いえることができます。

最後になりましたが、稲川先生25周年おめでとうございます。U君からの待望のおまんじゅうや、ささやかな私達のプレゼントを受けとられて、反対の扉から出ようとされて……あがっていらっしやったのでしょうか？ 49名（いつも213人欠けていましたが）、元気にやってこれたのも先生のおかげだと、一同感謝の念にたえません――な～んちゃって。

三年五組

これから暫しの間、筆者と共に三年五組なるものを、よく考えてみようではないか。さて……。

(1) 三年五組とは何か？……極めて抽象的かつ愚劣なる問であろう。客観的に述べれば、「理系日本史組・担任平正人」であり、主観的に述べれば「担任帝国」というか「隷属生徒」というか。(注・この解釈については多種多様の説有り。)

(2) 三年五組とその担任について……五組衆とその担任の間には、常に微妙な雰囲気が漂っているのである。ある時は上目使いに教壇を見上げ、又ある時は隣のオッサンを見る如く親愛の眼差(秋波)を向ける。この微妙なる違いを、五組衆は咄嗟の判断で決めなくてはいけない。幸い、担任は今日の天気について種々の予報をされるので、両者の間はすこぶるうまくいっているようだ(十一月現在)。又担任曰く、「信号無視するならボリさんのおらんとこで。」馬耳東風の五組も、これだけは忠実に守っているらしい。

(3) 三年五組は何をしたか？……これは難しい。大まかにいえば「気球を上げた」であるし、細かく言えば「女子は掃除をしなかった」ということになるであろうが、まあ中をとれば「何かしたか？」という辺りに落ち着きそうだ。

(4) 三年五組の前途について……三年五組は不可抗力により解散するであろう。筆者の脳裏を五人衆がかすめてゆく―連日子守り洗濯のM氏、未婚の母B嬢、二代目稲川を襲名するN氏等々。嗚呼、その中でひととき光彩を放つは、担任平正人氏であろう!! (多少のアレンジを含む)。さらば、五組よノ大手前よ!! (卒業できるつもり)

三年六組

三―六理系日本史。祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり―、三年二期の今頃になると、古代末期の末法思想以来連綿と受けつがれて来た仏教的無常感が全員の脳裏にたゆとうのであります。

思えば今春、来たるべき戦闘に備えるべく精神一統何事か成らざらんの心意気が高揚したのは目捷の間、必殺二次会御禁制破り組の異名をとるのに長くはかからなかったのであります。それにしてもうちは良い組でした。戦闘準備に屈することなく、文化祭では「靈感ヤマカン目で見るとしたし官宦クイズヒョコマワリ」と一聞即総毛立つ如きのクイズを厚顔無恥にも強行し、二期期には精力的にソフトボールリーグを消化するという明るくしかも奇蹟的に成績もTOP OF THE、学年を独走するという栄光のクラスだったのであります。閑話休題。ここで、後輩諸君に我が母校の斜陽化をくいとめてもらうべく対受験戦闘必勝法を伝授します。第33期生へ、諸君の学年(特に一の五)をあの 大手前H師が持たれる確率は極めて高い。幸か不幸か筆者の予想的中の折には、中学時代に言われたであろう高校に入れば遊べるという虚言は忘れ去り、真実一路、誠心誠意、リーダーの暗誦に励み給へ。第32期生へ、二年の内から一生懸命シケタンをやりましょう。第31期生へ、諦めなさい、筆者はよく言われる「我々の行動は受験によって著しくゆがめられている。」という定立に対して、反定立を「受験という一大障壁の下でこそ我々の行動は一層その本来性を発揮する。」とおきます。これらを止揚するのは諸君達の責務です。後輩諸氏の精力的な知的活動を願って止みません。闘争の果てには光があるでしょう。願わくは母校

大手前に精神闘争の灯が連綿たらんことを！

三年七組

春の陽の暖かさの感じられる四月から、あつという間に朝晩の風の冷たく感じられる秋となりました。

九十年の歴史を秘めた大手前、我ら三年七組は……。

四月、かろうじて？三年となり、友人のNとともに教室へ、「ウー、何やこの男臭さは、こんなんで一年過ごさなあかんのか」とNが深刻に言う。今ではプラス「ニンニク」の艶しい香りも漂う。最近我がクラスの平均点の低下がこれに因を発するという説もちらほらと。

ところで授業風景を。数学、世界史、コンポと全精力を傾けて、化学で精神を集中するためか、他の科目ではとかく、安らかな眠りにつく者数名、しかし政経の時間は、何の因果か、ハイジャックに、自衛隊、言論の自由の問題などに、激しく、深い意見が我がクラスの精鋭によって述べられた。

はっきり言って、このクラスには、まとまりがないのである。激しい個性のぶつかり合いである。しかし、この後、このクラスの終わりまでに、少しずつでも（絶対のリーダーがいなくても）皆の気持ちが、一つになろうとするのではないだろうか。

三年八組

我が三年八組は、今や終わろうとしている。この組の幾多の変遷

をふりかえってみると、輝かしいものはどこにもない。担任岡田氏を筆頭に温和な人がそろい、表面上はいかに平穏な空気が漂っているのだが、それがかえってお堅い先生の目に悪く写り、引き合いに出されるのはいつも八組であった。しかし生徒の方はどうかといえばそんなことを気にする様子もなく、ひたすら正将に出かけていき、先生の悪口を言い合うのであった。クラスの内部はどうかと言えば、会長インセントの独裁政治で一見、まとまっているように見えるのだが、HUGE、A君の乱など民衆の不満が高まり政局は絶えず不安定だった。それに加え、コーラス大会はかろうじて2位、体育祭で応援団長バブーフの必死の応援にもかかわらず惜敗、世界史の大教皇A氏の提案での討論会屈辱事件は、平民の心理を動揺させ、一時は険悪な空気が流れたものだった。現在、大学受験という大きな壁にようやく気づき始めた？私達の間に少しずつ団結の輪が広がり始め、同窓会を早くやろうというアホな連中は別にして、就職先は決まったとか、YMC Aの入学試験はむずかしいとか、中庭で誰かと誰かは離れられないとか、将来、先生のものまねでテレビ局に殴り込みをかけるとかいった話題に事欠くことなく、残り少ない青春を楽しんでいる。十年後には、私達はきっと大きな変化を遂げているに違いない。自称総理大臣、自称労働組合委員長という人はどうなっているだろうか？十年後が楽しみである。私達は、きっと社会に出て八組の一員であったことを恥？として進んでいくだろう！また筆者としてもそう願っている。最後に八組バンザイ！岡田先生バンザイ！

三年九組

於之綴九組之秘史。今、九組の歴史を知る者は九組の者だけである。他組の者が知り得るとすれば、それは「三年九組。担任・香川定一師。選択・理系世界史物理。男子三二名、女子一二名。」に尽きるだろう。何故それほどまで、謎に包まれているのか。原因は居住地区にある。入口一つの金魚鉢。一度戸を開けると、一せいに注目を浴びることのできるこの設計は、外来者の足を遠ざけるにうってつけであった。最初のうちは、彼女らは異性の多さに驚異を感じ、彼らは同性の多さにむさくるしさを感じて、他の組へせっせと通った。ところが、時が人の心を変えるのか、彼女らが自らの希少価値に気づき、彼らが彼女達を見直したからか、それともコンボの予習に余念がないのか、休み時間まで教室に残るようになった。かわりに授

業時間に外にいる者もあったが……。こうしてますます外部から縁遠くなった九組を、内部から見ると……。先ず六月に行なわれた文化祭。我が九組は喫茶店をやった。注文聞きは女の子の方がいい、皿洗いは女の子の方がうまい、ということ、一二名がフル回転したにも拘らず大赤字。誰が悪い？ 又その余波が夜の部に現われた。奮闘し疲れ切った彼女らはさっさと家路に着き、残った男子三十余名のみじめさは想像するにしのびない。又、我が組はどうもお上品崩いゆえ、体育祭、球技大会となると急におとなしくなる。厳密に言うとも結果が出た途端におとなしくなるのだ。その後の二次会で活発さを取り戻すかどうかは定かではない。それから……とこの辺で話を終わりたい。なぜなら、この金魚鉢をおおったボールをはぎとってしまったくないから。飯子の産んだ数々の逸話も懐しい。そして殺人ずれの英語できっと春には……。good-luck

クラブ紹介

格別!! 現在、部員の欠乏に悩まされているので、優秀な人材の入部をぜひとも期待して起こしています。やみません。

。運動系クラブ

陸上競技部

ラグビー部 楽しく明るい雰囲気をもットに、日夜練習に励んでいるわがラグビー部こそは、他の並みいるクラブを圧倒して、最も本格的、且つユニークな存在となっています。練習のきつさには定評があるが、練習後の充実感はまた

「走る・跳ぶ・投げる——頼るのは自分だけ」といわれる陸上競技部は、高貴なる先輩と華麗なる後輩が、それぞれ個性あふれ、記録の更新めざして練習に励んでおります。真紅の道に力を競い合うことによって、スポーツの真髄を追求しており、我が陸上競技部の

我が硬式野球部は、大手前高校では珍しくシーズン中は休日をも練習日とするクラブである。文武両立が高校野球本来の精神であるために各部員とも両立に励んでいるが、練習もそうゆるくないので苦しんでいるようである。しかし、我々はやめようとは思わない。自分に打ち勝ってこそ人間が成長すると思う

硬式野球部

からである。

軟式野球部

常に何かを追い続けるって、結果はどうあれ、すばらしい事だと思いませんか。私達のクラブは、そのような人物であふれんばかりです。無心になって白球を追い汗を流す。年をとってからは経験できない世界が、私達を呼んでいるような気持ちで、毎日、グラウンドを走り回っています。

男子ソフトボール部

華麗なフィールディングと確かなバッティング。それに加えて美しいマスクというのが、わが大手前チームの一大特色であった。

それが部員の数が増少の方向を示し、現在では7人しかない。そのうち一年はたったの一人。府下で男子ソフトボール部があるのはわずか二十数校。インターハイも夢じゃない。来たれ若者！

硬式庭球部

硬式庭球部は、伝統と実力を兼ね備えたクラブであります。コートは二日に一度というハンデをのりこえ、厳しい中にも和気あいあ

いとしたムードで練習に励んでいます。根性をつけることを目標とする大阪城トレーニング、厳しく優しいOBに見守られながらのコートでの練習、そして練習後の友との語らい。みんな君を待っています。

軟式テニス部

軟式テニス部は、部員は少ないけれども一人一人の個性が強く、それでいて一つに団結しているのである！練習中はきびしいが、練習を離れると先輩後輩の隔たりなく和気あいあいとしている。度々、OBの方も来て下さり、より一層活気に満ち溢れる。また夏の合宿はとても充実したものです。軟式テニス部で青春を謳歌しよう。

柔道部

おそらく最も伝統的であろう雰囲気の中に、ピリッとした何かが光っている。柔道部とは、そんなクラブです。我々は連日道場の隅で、臭い柔道着を着てがんばっています。

サッカー部

サッカー部は、部員数が2年12人、1年13人の計25人の割と多いクラブである。まず、

クラブの特色は、男だけのクラブであることと先輩と後輩の雰囲気もよく、なかなかまとまったクラブであることだ。戦績は現在13戦9勝3敗1引分けと、まあまあ強いのではないかな。

卓球部

過去に数々の名選手を生みだし、現在においても、I・H、国体で上位を占める大阪の高校卓球会において、その中核をなす近附・興国・大谷・四天王寺の強敵となりうる人材を育成しつつあるのが、我が卓球部である。そのため、毎日幅広い練習を行なっている。今後、今まで以上に努力していきたい。

男子バスケットボール部

放課後は体育館を占領し、短足ながらも足をフル回転させ、コートを全力疾走している。顧問は御存知、庭野先生であり、大学の先輩なども時折見に来てくれる。現在の戦績は3勝2敗で、夏の大会では3回戦で上大に敗れた。今は、冬の大会を目標にして、練習にも熱がこもっている。バスケットに興味のある人は遠慮なく、練習を見てもらいたい。

女子バスケットボール部

火木曜日は運動場、大阪城で体力作り、他の日は体育館で技を磨いています。「女子ラグビー部」の異名通り、負けずぎらいのファイト満々の人ばかり。練習は厳しく苦しいですが、その中から生まれる友情や満足感は何物にも代えられません。いろんな問題も起りますが、部長、マネージャー、顧問の先生方の下で一団となり前進して行きます。

男子バレー部

生きがいというものを捜し求めている君に、充実した涙を流したい君に、そして燃えたぎる力と命を爆発させたい君に、男子バレー部への入部をお勧めします。たった一度の青春ですぞ！勉強だけが高校生活じゃない。高校生活において、青春において、最も大切なものを一緒に求めていくクラブです。

女子バレー部

土の上といわず、床の上といわず、絶えずはいつくばっているクラブ——それが我が女子バレー部である。今年から顧問が独身の田中先生に変わり、軟式バレーから硬式バレーへと大きく飛躍しようとはりきっています。三

部昇格も、もう時間の問題でしょう。ヒマな人、いっしょに一足とびをしましょう。スマートになりますヨ。

登山部

山に恋をした者の集まりが登山部なのです。夏には北アルプス、秋には睡眠なしの六甲全縦、決死の冬山制覇、ファイトの塊ともいえるのです。そしてそれらの登山やスキー合宿により自然界の尊さを知り、語り合い、とともに晩秋には夜空の星のもとで感傷にふけり自分をみつめる……ロマンチックなクラブでもあるのです。

水泳部

我が水泳部は夏は水中、冬は陸上と対照的な練習をしています。夏のシーズン中は毎日あり、7・8月ともなれば、地獄と化します。試合は7・9月にあり、I・H、国体に出場した人もいます。冬は大阪城でランニング、サーキット、時間が余ればソフトボールなどをします。つらい要素でなく、楽しい要素の多いクラブです。

剣道部

君は今、どんな顔をして、一体何をしているの？ 君が既に他への定ベクトルなら、諦めよう。しかし、まだ動ベクトルだったら、

少しは我々のベクトルにも応えて欲しい。餃子もある充実したクラブです。だから剣道部へ！

空手道部

弱き存在は、暴力を前にした時、まともにも言えなくなってしまう。もし君が、強くなりたいと思うなら、それは人間として自然な欲望である。我々は、実用的な練習を目ざしている。意欲ある新入部員を待っている。

文化系クラブ

E S S

本校唯一の外国語部！長い伝統に養われた素晴らしい実績は、文化祭、文化クラブ発表会などに生きております。御存知、クラブ長屋の一室。軽音の奏でる音楽をBGMに、毎



週火曜と土曜、活動しております。歳書多数。ししも完備。只今年男子新入部員の募集をしております。

映画研究部

私達のクラブは常に不活発な活動しかしてませんが、休みになると奈良や京都などに映画を撮りに行ったりもするのです。今年の春休みには京都に行ってきました。冬休みに部員全員で映画を見に行くという案もチラホラ出ています。女子ばかりですので男子の方もぜひお入り下さい。一緒に映画を作りましょう。

音楽部コーラス班

コーラス班では、年に数回のミニコンサート、文化祭、冬のクリスマス会などの行事があります。また夏休みにはハイキングもします。今までは合唱組曲などが主体でしたが、これからはフォークソングなども歌っていると考えています。ですからコーラスという固苦しい概念を捨て、今からでも遅くありません。是非、我がクラブに入ってください。

音楽部軽音班

諸行無常、弁証法的唯物論がまたに浸透する日本情勢の中で、鋭く君のハートを突き、そして君を幻想の世界へ引きずり込む。それが軽音楽なのです。君の心の中を音にぶつけてみませんか？ 何も知らなくても鍵盤一つ弾けば音が出る、それでいいのです。もし君も陶醉に浸りたいのなら我がクラブへおこしやす。

美術部

今日輪固血羅輪美術倶楽部出有理麻果。阿留時輪油絵具煮間身冷、又阿留時輪木炭出手尾黒加羅使目留。阿留時輪大前之文化向上煮貢獻師、又阿留時輪貧々樽口鼻之美術部室出動目希、確固戸師大前之暗黒街煮君臨果留。部員之思考性甚情異常煮師手其之行爲誠煮不可解菜理。出澡戸煮角皆美術我理屈抜出好気名情家菜之出果。

地歴部

本館三階、俗に言う金魚鉢は書道教室横に我らの陣地。いにしえの間。有り。月水上に地味ながら地理・歴史の分野にわたり研究す。春・秋の史跡・寺巡りの気ままな見学会。夏はOBらと合宿。文化祭ではテーマ研究の発

表展示。温故知新の精神で地歴部員は今日も集う。見学・冷かし・仮入部歓迎す。いにしえの間へ一度おいで！

演劇部

演劇部は少し怠慢ではあるが、仲の良い楽しいクラブである。部員は現在6人だが、結束が固く、日夜各人の演技の向上をめざし、いきっている。クラブ長屋でも最もみじめな部屋の中で、演劇・宝塚・野球・政治問題にまで至る議論を重ね、ここから新しいメルヘンが生まれるのである。人生に悩み迷う諸君よ、演劇部へ来たれ！

写真部

「なに!? 大事前に写真部なんかあったんか!?」という声が今にも聞えてきそうで、これを書いていて恥しいんですが、残念ながらあるんです。まさに弱小クラブではありますが、予算も少なからずと、設備は部員数に比べると整いすぎているほどであります。現在一年部員は男女各一名。DPEを習いたい人、どうぞおこしやす。

新聞部

本館四階、校内一見晴らしのよい部屋を部室に持ちます我が部は、活版印刷・ガリ印刷をはじめ、壁新聞も発行する内容の非常に充実したクラブです。活版印刷は、従来年一回でしたが、今年は年三回発行する予定で、スタッフ一同張り切っております。又、全国的に新聞や手紙の交換もやっています。

理化学研究部

我が理研部は、人類の科学的繁栄という使命を負った者達の集団である。部員は天文・化学・物理の各分野に積極的に関わり、年に一度発行する部誌は、部員の情熱的(?)な研究報告を満載している。夏の合宿(一部にあれば海水浴だという指摘有り)では、夜空のきらめきを眺めながらの流星観測。興味のある方はぜひどうぞ。

文芸部

傾いた天井の下で、薄暗いたたひとつの螢光灯か、ぼんやりと人々を照らし出す。空と夕焼け(青色の天井と赤色の床)が、同時に存在する不可思議な部屋。

人々は、しばしば神秘的な言葉を話す。

「原稿、書いた?」

「ぜんぜん、書いてない」。

生物部

大阪の名門大手前高校の名門?生物部は、「気楽にやろう」という精神に基づいて、笑いのたえないまったく楽しい活動をしているクラブである。夏休みには時々合宿を行い、自然をじっくり研究するなど文化系クラブとしては活動内容が充実しているほうである。最近は大坂城、淀川を中心に活動している。自然に親しみたい方は、生物部にはいつてみませんか。

書道部

書道部は週三回、月・水・金曜日に、本館二階の作法室で活動しています。ふだんは条幅で、おもに古典の拓本を手本に練習していますが、現在は、来たる府下高校展を目標に練習に励んでいます。今、部員は一年生三人、二年生は四人の小世帯なので、新入部員大歓迎です!! 書道に興味のある人は、ぜひ一度練習を見にきて下さい。

放送部

現在校内放送をすることは不可能ですが、春には文化祭で放送劇を、秋には文化クラブ発表会で番組を発表する計画です。日ごろはアナウンスの練習、番組製作の研究などを行っています。知識のあるなしなんぞ問題じゃない! どんどこ入部されたし。

吹奏楽同好会

われら吹奏楽同好会は、や・ろ・うと美女?の集まりで、大坂城、新館、長屋をねり歩く一種のアホの集団であります。勧誘にはやさしい顔をした先輩も練習になると応援団顔負けのしごきの連続です。OB会は不活発で年に現役と2回ぐらいいしか会えません。まあ興味のある人はクラブ長屋をのぞいて下さい。

ダンス同好会

創作ダンスとは、音楽の持つリズムと、美術の持つ造形力とを兼ね備え、豊かな情感を身体で表現する芸術である。

ダンス同好会とは、そのような、面倒臭い理屈をふり捨て、文化祭やリサイタルの舞台を目指して、道場の片すみで、ひたすら足を振り上げている。なぜかダンス部"と言えないサークル。

SF同好会

SF同好会はワン・パターンとマンネリをモットーに「ヤマト」研究及びアニメ制作をやっています。機関誌シャンプロウという純(?)創作SF誌もありますが、ついに年一冊刊行というタイムマン誌になりました。

君もSF同好会に入会して痴性と狂姿を身につけよう!!

棋道同好会

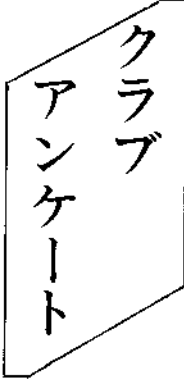
部長H氏「怠慢部長と言われているが、その実、怠慢。長老T氏「振り飛車一オンリの奇怪な老人。新聞部員Y氏「主に新聞、次に自治会、最後に同好会。怪力I君「居飛車」専門。先輩I氏と遊んでやるのを生涯の楽しみにしている。秘密兵器H氏「大会があると登場する。その実力は府三位。以上現役五名健在であります。

鉄道研究同好会

十一月に新規結成された、できたての同好会ですが、前歴もあり、もと鉄研所属の先輩で現在国鉄新幹線総局で勤務している方もおられます。ひたすら鉄道を愛し、鉄道に青春の情熱を燃やす男たちが集まった同好会です。

落語研究会

テケテンテンチーエェしばらくの間おつきあいを願います。我が落研はまだ満一歳でございいますが、あらゆる学校行事で活躍。文化祭では「驚とり」にて観客を大爆笑のうず巻き込み、また文化クラブ発表会では「3人会」。師匠喜笑の熟練した芸を筆頭に、各会員の個性あふれる芸、マネージャーも豊富。我が校出身の落語家桂歌之助さんの指導も今後、予定されてます。二代目募集中!!



ジャン出た!! 涙、涙のクラブアンケート。この度、新企画を設けようではないかということになり、「何をしようか」と考えた揚句、「アンケートをしようやないか」と結論

が出て、質問に悩み、皆さんに迷惑がかからない喜ばれるものを。

そこで、「クラブにアンケート出せえ!!」という意見。これは名案。次にあげてあるのはウソもあるだろうけど、こちらとしては満足なものができたと思う。

「あなたのクラブのあなたのことが書いてあるかも?」

アンケート質問

- 〔質問(1)〕 あなたのクラブの練習は?
 - ①楽しい ②つらい ③怠慢
- 〔質問(2)〕 あなたのクラブのキャプテンは?
 - ①怖い ②おもしろい ③無に等しい
- ④尊敬すべき人物 ⑤早くやめてほしい
- 〔質問(3)〕 あなたのクラブの名物は?
 - 〔質問(4)〕 あなたのクラブのよくいく飲食店は?
- 〔質問(5)〕 特定の異性とつきあっている人は?
- 〔質問(6)〕 あなたのクラブの目標は?

運動系	ラグビー	陸上	硬式野球	軟式野球	ソフト	硬式庭球	軟式庭球	柔道	サッカー	卓球	男バスケット	女バスケット	男バレー	女バレー	登山	水泳	剣道	空手
(1)	①②	①	②	①	①	②	②	①③	①②	①	②	①②	①	①②	自由	①②③	①②③	
(2)	①②	②	いいに	④	④	④	④	③	④	③	④	①②	⑤	②	④	②	①	
(3)	右色・島谷・岡崎・高橋の会話	藤田久義(1年)	山岸君(4代目まんが)	勝率?割	ハンサムな部員	クリスマスに行く混合ダブルス	なし	ひざをかかえて人生に悩みグルーブ腰痛皮膚病の御三家	講堂のラケットによるガラス破損	男バス	顧問の灰皿投げと竹刀打ち	ワンマン、一足とび	ピンクレディのものまね日さん	歌、酒、女	吉見のおどり、クラブノート	大手前食堂		
(4)	王将	中華料理店	大手前食堂	なし	王将	ヤング・王将	王将	王将・ドムドム	王将・ドムドム	府庁スカイラウンジ	王将	大手前食堂	王将	サオコマ・松坂屋のタコヤキ	王将(TV出演)	王将	大手前食堂	
(5)	男1 2 3 女1 2 3	11 11 0 6 2 9 9 9	1 11 0 6 2 5 2 12	0 10 2 5 2 12	3 15 2 6 1 4	0 1 1 6	1 7 2 4 0 0	0 6 1 6 2 6	1 10 2 12 0 5 11	? 13 2 12 2 10	4 16 2 11	? 16 1 7 2 5	2 8 3 9 1 5	0 5 8 8 2 4	0 5 8 8 2 4	2 7 2 6 1 1	1 11 0 5 2 4	
(6)	府立大会best 8	step by step	甲子園のみ	全国大会優勝	1回戦勝利or世界大会優勝 質実剛健	大阪府下で恐れられる学校に	インターハイ制覇	人生について悟りをひらくこと	近畿人会、高校総体制覇	近大附のユニフォームに勝つこと	インターハイ出場	一部昇格	インターハイ、国体、春の高校バレー制覇	カラコルム・K ₂ 登頂	インターハイ、国体出場	たてまえ…近畿大会出場 はんね…かけ声で日頃のうっぶんをはらすこと		

S F	ダンス	吹奏楽	放送	書道	生物	文芸	理科	新聞	写真	演劇	地歴	美術	音楽声楽	音楽軽音	映画研究	E・S・S	文化系
④	①	②	③	①	③	①	①	①③	③	①③	①③	③	①	①	③	①	(1)
③	①	④	②	④	④	①②④	④	②⑤	④	②③	③	②	④	④	③	③	(2)
必殺ヤマト人間	練習後の「フアイト」のかけ声	フンクワット	部屋のリモート	コーヒー	なし	男子部員の存在そのもの	なし	トランプ	二年のMr T & Mr U	宝塚、政治、野球	坂1の規模を誇る「いにしへの間」	二年生の合作「夢」	なし	くまのベース	なし	E S S (エッサッサ)	(3)
なし	我が食堂	中庭食堂	明治プラザ	ヤング	なし	ダーリン	なし	大手前食堂	なし	トラス	ティファニー	行かない	なし	フレンド・フランス	なし	行かない	(4)
0 2 6 0 ? 3 0 0	0 0 0 0 0 1 7 0	0 4 1 3 1 6 0 9 0 4 1 4	0 0 3 0 2 0 0 2 0 2	0 0 0 0 0 3 1 4 ?	0 8 0 ? 7 0 0 ? 1	1 1 0 2 0 0 1 5 0 2	0 2 0 4 1 3 0 2 ? 4 0	? 5 ? 2 ? 5 ? 7 ? 3 ? 2	0 1 1 5 6 1 4 0 1 0 0	0 0 0 0 0 0 1 1 6 ? 3	0 0 0 0 0 0 2 1 4 3 5	1 4 0 2 0 0 11 2 10 1 6	0 4 0 1 0 2 0 8 0 9 0 12	0 12 2 8 0 4 0 7 3 12 0 6	0 0 0 ? 3 0 3 ? 3	0 1 2 1 3 1 5 1 6 1 5	男① ② ③ 女① ② ③
全人類の社会を背負って立つ人間の育成	文化祭・リサ・イタルの舞台を成功させること	もちノクラブにしてくれノ	コンクール入賞	府下高校展	活発に活動しよう!!	北野に負けとない	実際に観測できる反射望遠鏡の製作	部屋の改善	世界写真コンテスト金・銀・銅賞独占	新人部員をひきこむこと	温故知新	なごやかなムードで活動を!	楽しく歌うこと	ヤマハ・ポプコン優勝	自作映画を作ること	American English	(6)

いけない。失敗は教訓になるからしてもいい。」というのが先生のモットーです。私達は、そのありがたい(?)お言葉に乗じて、実習のたびに毎回あわれな味つけをしてしまい、肩をたたいてなぐさめあって試食をしているのです。

授業をなさっている時の先生は、とてもやさしい女性なのですが世間の不正におつかったりした時は、俄然／＼豹変なさいます。環状線でいやがらせをしていた酔漢をたたひと言でおとなしくさせた話、変質したジャムを売っていた店に乗りこんでいった話など有名です。不正を正すのはあたりまえのことですが、いつも泣き寝入りしてしまうような事に先生は敢然と立ちむかって行かれるのです。大変勇気ある女性なのです。(まあ、先生のお身体の迫力を思えばうなづけないことはありませんが……)

先生がいつもおっしゃるのは、「料理は愛する人に食べていただく時いちばん上手にできる。」ということなんです。その言葉を胸に私達は日夜、塩、砂糖、おコゲにまみれて努力しているのです。

男子諸君、おわかりになりましたか？

石川先生

A 「お前、石川いう先生知ってるか？」

B 「知ってる、知ってる。体研で一番若いとか言う、メガネかけたあまりがっちりしてへん先生やろ。それがどないしてん？」

A 「何か、その先生にまつわるおもしろい話知らんか？」

B 「うーん。そやな、そういえば、あの先生、出席取る時、息つきをせんと全員の名前を呼ぼうとした。そやから最初のころは

それを楽しみに体育の授業を受けとったけど、今はおもしろない。」

A 「なんでや？」

B 「近ごろは、出席簿の順に名前呼ばんとメチャクチャに呼んだりしてるからや。こんなん、さっき言うたんよりおもしろないやろ。」

A 「まー、そやけど。ほかに知ってることないか。」

B 「そやそや、あの先生、剣道三段の腕前やった。そやから、よく道場に來て、防具つけて剣道やっとなるわ。それに、あの先生、ダンスがうまいねん。」

A 「ダンス?! あの踊るやつか。」

B 「そや、道場でようダンス部練習してるやろ。そやから道場に來たら、いっしょにダンスをしてるねん。この前なんか、あの重たい防具をつけてダンスの回るやつまねしとったら、そのまま、倒れてたで。」

A 「えらい先生やな。大手前の先生の内でも特筆すべき存在やで。」以上述べられた事は、すべて真実であります。しかし、石川先生が人間味豊かな先生であることを最後につけ加えておきます。先生についてなおよく知りたい方は、体研へどうぞ!!

片岡先生

片岡先生は非常勤講師で、火曜と金曜しか、授業されなくて、現在も、阪大の大学院へ行っておられます。

先生の変わったところは、「きみらにあいさつされても何もうれしくないからせんでもええで」とおっしゃるところです。また授業中は、生徒の方を見ず、つねに、遠くを見つめておられます。それで

も何か内職しにくいのは先生の偉大なところですよ。

また先生は、自信と信念を持っておられます。教科書を否定しても自分の説をいろいろと話されるのです。若さとフットあふれる授業なのです。たとえば、

「この助動詞はややこしいから、またあとでいうから試験に出たらまちごうて下さい。一つや二つたいしたことないやろ。ややこしかったら、こっちも適当に、『まる』つけるし。」

というぐあいなのです。

また先生は、女生徒に割と人気があり、愛称タコ坊だそうです。また、ピンシャツという、通称があります。これは、先生がよくピンのシャツを着られるからです。このように、先生は大手前の中ではアイドル的存在なのです。年もばくたちとあまり離れていないので親しみもてるんだと思います。

先生は、この大手前にはめずらしい、若さを持っておられます。まだ人生はこれからだという人ですから、この先も、勉学に励まれ「片岡文学」なるものを確立されることを期待しております。

渡辺先生

私たちが大手前高校に入学して、初めての社会の時間は図書室の案内でした。図書室に行くと、小柄でメガネをかけて作業着を着た兄ちゃんと言えないけど、おっちゃんというにはかわいそうな男の人がおられて、説明をしてくださいました。そのとき私は、社会の時間とはいっても、図書室の案内は事務の人がしてくださるのかと本気でそう思いました。しかしその人はまちがいない、私たちの社

会の先生、渡辺先生でした。それくらい渡辺先生の第一印象は先生らしくありませんでした。そして授業を受けるうち、やっぱり先生は、先生らしくない先生です。

渡辺先生の授業は、友達の話聞いてるような親しみを感じます。コマージュの文句や流行語で私たちを楽しませてくださいます。うけないと恥かしそうに「次ぎい」とおっしゃるのがとてもいいのです。また、私たちが先生の話に反応しないと「そう思いませんか？」と前の人の顔をのぞきこまれたり、誰かが目立って変なことを言ったりすると、「ほんまに？ うそやん」とか、「あの子誰？ ○○さん？」というような話し方をされるので、私たちと同年代の人のような感じを受けます。私たちとの交わりを大切にされていると思います。それから、いろいろな事によく興味を示され、思ったこと、感じたことを、そのまま口にされます。例えば、授業中に突然出た疑問点は、小さい事でも一生懸命考えられるし、何か新しい事がわかると、「初めて知ったあ。」とか言われるのです。私たちはそういう先生を見ていると、私たちと同じ高校生のような若さを感じ、親しみを感じるので。

岡先生

岡先生ねえ…（と先生の大ファンである私メは目を細めながら）何といっても、岡先生の一番の魅力は、ひびきのあるお声なのです。録音してカセットスタディ「古文」なんて売り出すと売れるでしょうねえ。こう書いたら「顔はどんなやー!!」と言われそうですが、お顔も又、笑ったところがすばらしい!! 教科書をお読みになる時

など、長くのばした髪がはらりと垂れて、私メなんてふと見とれた
りしたこともありました。(だからあの現国のテン!!)

また岡先生は、表情ひとつ変えず何でもズバズバおっしゃいます。
たとえば成績表をかえすときに「赤点が少し多いですねえ。それも
20点台ならまだしも、10点台やひとけたとはねえ。ひとりでいくつ
もがんばっている人もいますしねえ。」と、赤点族にとってひじょ
うにつらい言葉も、淡々と先生の口から発せられるのです。

こんなこともありました。修学旅行の説明の時でした。つけ、「修
学旅行必携」の旅館での諸注意の欄に「③就寝は定められた部屋で
すること」というのがあって、先生は付け加えて「結婚旅行じゃな
いんですから部屋のあつせんなどしないこと。」最初は何のことだ
かわからなかった私メもその真意に気づき、どきッ!!

また、岡先生はチャイムがなると同時に、どんなところをやって
いても「じゃ次の人、考えといて下さいよ。」と、サッと切り上げ
て授業終了。次の授業が体育であったり、まして4時間の授業であ
ったりすると、生徒は人助かり!! それに、テスト前にその範囲が
すんでいると、テストまで何時間残っているように、
かならず自習!!

影では職業教師なんて言ってます
けど、私たちファンにとっては、岡
先生のすべてが魅力なのです。先生
がいつまでも、私たちの良き先生で
いらっしやいますように。



文 芸

「自分らしく生きる」ということ



三年三組 和田 中子

小学校の卒業アルバムの寄せ書きに、私は「自己に忠実に」と書
いた。当時私は何よりその言葉が好きだった。いつだったか、アル
バムをめくっていてふとそれが目についた時、思わず苦笑してしま
ったものだった。簡単にそう言えた幼なさを微笑ましく思う気持ち
と、その頃の自分への羨しさが入り混った、複雑な気分です。

自分に忠実に生きる。それが一番難しいのだと言った友がいた。
確かにその通りだ、と思う。絶海の孤島で一人で生活しているなら
ともかく、現実には我々は沢山のひとのかかわりの中で生きている。
同様の迷惑も考えずに自分の主張だけを押し通せば、それはもう、
「忠実に生きる」ことを通り越して、我ままに終ってしまう。

といって、全てに於て他人と妥協し、はっきりとした自分の意志
というものを持たずに生きることが良いとはいえない。どこまで自
分の意志を主張し、どこまで他人の意志を受け入れるか、それが最
大の問題となってくるのである。

私はよく自分の優柔不断さに腹を立てる。集団行動をとる時ほと
もかく、自分個人の事となるとでんで意気地がない。二者択一すら
満足にできないのである。さんざ悩んだあげくやっと決心しても、

今度は行動に移す決断が下せない。そんな自分に苛立ちを感じながらも同じことを繰り返してしまう。どうも私は、一つの行動によってひき起こされるであろうでき事を勝手に想像し、しかも悪い方へ悪い方へと自分を追いつけてしまう悪い癖があるらしい。どんな行動をとっても必ず後悔は残るだろう。まるで後悔の残らない事など一生のうちでも数える程しかないのだ、ということとはわかっているのに、同じ後悔が残るなら、自分の意志で思う通りに行動した方がいいと思えば思う程、迷いが先に立ってしまう。誰にも一度や二度はそんな経験があるのではなからうか。

この三年間、私はありとあらゆる事をした、と思う。自治会活動もクラブ活動もクラスの事も、そして人並みに恋も。けれどそのうちいったい何度自分に忠実になったのだろうと考える時、かつて自ら言ったはずの言葉からかけ離れている自分を発見したような気がして、どうしようもない自己嫌悪に陥ってしまう。それでは忠実になれないまでも、一番私らしかったのはいつか？と問いかけてみるとそこでもやはり詰まってしまうのである。

私は詩が好きだ。いや、詩というのはおこがましい。言葉並べ、とでもいおうか。高校に入學した時、紙1だった詩のノートが今では紙26を数えるに至っている。大部分が駄作ではあるが、数だけはべらぼうに書いた。その中で綴られてきた無数の言葉達。それこそが何よりも私らしいものなのではないかと思う。一言一句に、私の軌跡があり、その時々、の偽りのない姿が残されているのだから。

陽気に騒いでいる時も、忙しく走り回っている時も、どこかに無理がある。たとえそれが意識的に造り出されたものであったとしても私の一部分には違いない。今では、それも半分地になってしまっ

た感もある。それでも元気に振舞えば振舞う程、一人でいる時の孤独感はいっそうつのる。誰にでもあるであろう。そんな外見と他人にはわからない部分とのひずみを埋めてくれたのが詩だったのである。

支えを失った人間は弱い。不幸はいつも突然襲ってくる。その時回りに支えてくれるものがあるとは限らない。だから自分の中に、自分を支えられるものを持つということは、生きていく上で大変重要な意味がある。つらいこと、悲しいこと、ノートに向って書いていると、不思議なことに耐えられた。今日まで私が生きてこれたのは詩のおかげだと思っている。そうだったもの——支えとなり得るものを、まず探してみたい。

我々誰も、生まれたくて生まれて来た訳ではない。しかし十数年生きてきて、少しは生きることの難しさがわかるようになった。今なおかつ生き続けているのは、「与えられた生」の為ではなく、「自ら選び直した生」の為でなければならぬ。

何故生きるのか？ その答えはすぐには出ない。人間が生まれたのも、知性というものを与えられたのも、ただ生涯かかってその答えを見つけ出す為なのだと言っても間違いはあるまい。そう考え及ぶ時、先程言った「自分らしく生きる」ということが再び問題になってくるのである。自分が自分である、という証明は、簡単なように見えて、その実、なかなか困難なことだ。外見上の区別ではなく、その人の本質によって本人だと認めてもらえる人はそう多くない。例えば私がやってきた校内活動の数々は、別に私でなくても、他の誰でもよかったのである。それどころか、私以上にうまくやっ

てのける人だっていくらでもいただろう。けれど私の書く文章、それは私にしか書けないのである。似たものを書く人はいたとしても、育った環境、考え方、性格、その他様々な要因によって、必ず何らかの相違がある。それは、それらの要因が殆ど同じであるはずの一卵性双生児でさえ、異った人格を持つという事実からもわかって頂けることと思う。その人それぞれの独自の文によって、たとえ一人の人にも、何かを感じさせ、影響を与えられるような、そんな文章を書くことができたなら——そこで始めて、私の生というものが肯定されたことになる。

私はある詩の同人雑誌に加入している。毎月店頭に並ぶ本に、自分の書いた詩が活字になっているのを見ると嬉しくなる。人に見せる詩——見られることを意識して書いた詩と自分ひとりで書く詩とは、おのずから違ってくるだろう。ある程度の美化もあるだろうし、嘘もあるだろう。そうは思っても、見ず知らずの遠くの人の詩を読む時、又そういった人たちから手紙をもらった時、顔も知らない数多くの人たちとの心のふれあいを感じる。そういう瞬間、「私は生きているんだ。」と、あるいは「生きていてよかったな。」と実感するのである。私が与えられる影響などちっぽけなものだ。すぐに忘れられてしまうかもしれない。けれど、一ときにせよ、誰かの心に止められたのなら、もうそれで十分なのである。

という言い方をすると、生を肯定する為には芸術や、それに類するものでなければならぬように聞えるかもしれないが、そうではない。直接にであれ間接にであれ、何らかの形で人と接触できることなら何でもいいのである。そしてこの人間社会で生きている以上、殆どすべてのことがそうだと言えると思う。中でも教師という職業

は、生きた人間との触れ合いそのものを仕事とするだけに、最もいい例と言えるかもしれない。そういう観点にたってみると、単に知識を教えるだけでは意味がないことになる。それだけなら、機械の方が遥かに正確に、しかも迅速に教授できるはずだ。にもかかわらず人間が教えているのは何故か？人間なら、時には間違ふこともうまく意志がかわみあわないこともあるだろう。だがそれでいいのである。人間なればこそ教えられる何か——学問知識だけではなく、もっと大きな、そして人として最も重要なこと——逆に言えば人間でなければ教えられる何かがあるはずだからである。人と人との心の微妙な触れ合い、意志のコミュニケーション、その面で、目下のところ、どんなに精巧な機械でも人間にかなわない。いわゆる、「人間らしさ」というやつだ。それは受け止める方が感受性の強い年頃だけに、より深刻な問題になってくる。現に私自身も、小・中・高校と、いろんな教師を知り、その中には良きにつけ悪きにつけ大きな影響を与えてくれた人もいる。それらの人とかかわりがなければ、私はもっと違った人間になっていたかもしれない。そうではないかもしれない。それはわからない。しかし今の私が存在する為には、絶対に必要な出会いであったのだと確信することができ。よき師に巡りあって、それ故、将来教師になりたいと思った、という話は時々耳にする。その場合、その人にとって一人の教師が生を左右する程の大きな影響を持っていたことになる。

教師というのはただのサラリーマンであってはならないと思う。自分の影響力の強さを十分に理解した上で、それなりの覚悟と決断をもって、心してかからねばならない。難しいけれど、それだけにやりがいのある仕事でもあるといえよう。

同じことがもっと身近な、「親」というものにも言える。親の与える影響は何にも増して大きい。それは万人が認めるところであろう。「子供にとってよい親になる。」それだけでも、その人が生まれてきた価値は十二分にある。他の誰でも変わりはないという、育てるだけの親、もしくは産むだけの親ではなく、子供の人生にとって、親として、一個人として、必要不可欠の人だったと言ってもらえるような親になること、それが人間としての最低限の条件であり、同時に最大の課題なのだ。

自分が自分であるという証明は、こうしてみると誰にでもできるはずの事なのである。

先日私は三田誠広氏に会った。彼がこれまで送ってきた年月は、波乱に満ちたものだった。彼の半生だけで一編の小説にでもなりそうな話なのである。その彼が処女作を書いたのが17才。つまり今の我々の年頃だ。その時既に、彼は自分の進む道を決めていたということになる。一番自分らしい生き方、自分を表現できる仕事——作家——をみつけれ出していたのだ。これは大変なことである。勿論、作家などという職業はなろうと思っただけからといってなれるものではない。才能に加えて運がなければ成功しない。幸い三田氏は才能にも運にも恵まれて、あの若さで芥川賞を授賞された。けれどその裏には、夢を捨ててしまわず、大学を卒業し就職してからも、「自分にはこれしか能がないのだ。」と信じて書き続けたという、不屈の精神があったことを見逃してはならない。

現在、我々は一生を決する大切な時期に來ているといえる。どういう方向に進むかで、将来の職業がほぼ限定される。いやが上にも

慎重にならざるを得ない。一度道を見誤ってやり直すのは、強い意志と膨大な時間と血の滲むような努力を必要とする。大抵の人は途中で挫折してしまうだろう。しかし、だからといって現実的になる余り、夢を捨ててしまうのは悲しいことだ。目標は大きい方がいい。実現する、しないよりも、それに向かって精一杯努力することが貴いのだ。それを非現実と笑う権利など誰にもない。

我々はまだ若い。不可能だと諦めてしまいう前に、自分の限界に挑戦し、ギリギリまで試してみたって損はない。失うものもあつたとしても、それ以上に得るところも大きいからだ。繰り返して言う、夢を持つのではないか。でっかい夢を！

今我々が本当にすべきことは何か？ 生涯を費して悔いのないものをみつけることはたやすいことではない。だが、中途半端なところからは中途半端なものしか生まれてこない。何か一つ、全身全霊をかけて打ち込めるものがあれば、それは勉強であってもクラブであっても恋愛であってもいい、そのひたむきな姿勢の中から、何かを学び、何かを発見できるだろう。やがてそれはあなたがあなたである為の最大の要素となり、あなたの一生の貴重な糧となるだろう。

人の一生などはないものだ。今日元氣だからといって明日も元氣だという保証は何もない。だからこそ、いつ死んでも悔いを残さずにすむように、一時一時を大切に一生懸命生きなければならぬ。「自分らしく生きる」ということ、それは抽象的でつかみどころのないものかもしれない。が誰の足元にもろがっている、いって単純なことなのである。一つのこと、ある時は支えとなり、

又ある時は自分の象徴となり得ることに全力を尽して打ちこんでみる、全てはそこから始まる。

いりゅうじょん

一年六組 松 嶋 康 介

朝から布団にくるまってばんやり雨の音を聞いている。頭が妙に重く、少し痛む。が無理をしても学校へ行けばよかったと思う。空に垂れこめる灰色の雲や降りしきる雨の音は憂鬱で、多少頭痛がしたとしても学校にいる方がまだしも気が晴れるに違いない。机の上からラジオをとってきて、スイッチを入れた。軽やかなメロディが流れる。何となくほっとしたものを感じた。どうやら歌謡番組らしい。

.....

アン・ドゥ・トロワ

踊りましょうよ

アン・ドゥ・トロワ

流れるように

人は誰でも一度だけ……

曲は途中でフェード・アウトされ、代ってDJの声が響いてきた。

……今おかけしましたキャンディーズ「アン・ドゥ・トロワ」はベスト・テン今週第五位でした。続いて第四位は……

大きなあくびを一つする。そして、今度は何か読む物を探すために本棚に近寄った。乱雑に詰め込まれた文庫本の中から一冊無造作に抜き出してきて、ベッドに寝ころがってパラパラとめくる。やたらと多く鳥の写真がはさまっていることから、「かもめのジョナサン」だとわかる。ラジオは相変らず歌謡曲を流し続けている。少しうるさくなってきた。適当に気の向いたところから読み始める。頭は重い、痛みは消えたようだ。

「……ジョナサン、リビングストーンよ、汝もやがてはさとするであらう、無責任な行いが割りにあわぬものだということを。われらの生は不可知にして、かつはかり知れざるものである。わかっていることはただわれらが餌を食べ、そしてあたうる限り生きながらえるべくこの世に生をうけたということのみなのだ」

十月の末まで続いた異常な高温のためか、体の中に溜った夏の重さはなかなか消えようとしめない。鼻をつく汗の臭気や蝉しぐれ、地を突く金色の日射しと圧倒的な熱、疲労、その他多くの混沌とした曖昧さが陰の中で澱んでいる。いつもなら、それらの起こす波動が最大に増幅されると、ある日、秋風が吹き始めることになるわけだが、今年はそうではなかった。だから、流れ出てゆくべきものが、深く沈澱し、高密度なものとなってしまった。

飽きたのでラジオを消した。雨の単調なリズムは四方を閉鎖し、

周囲のわずかな空間をスクリーンに変えた。

午後の教室——優しい風景。射し込む柔かな日射しが横たわる死を偽る。ぼくたちはどっぴりと没って夢を夢みる。

夕暮れの満員電車——重い風景。家路を辿る疲れた人々の作る翳の中で、彼らの内に潜む醜い生き物が蠢く。恐怖とともにわけのわからない憤りが起こり、叫ぶ。か、叫び声は金属音によって分解され、夕闇に飛び散り、消え去った。

雨の音が激しくなった。

体の中に溜っている夏の重さがある力を加えて圧縮し、掌に収まるようにする。そしてそれを現実逃避からの免罪符にしようと思う。

目の前に広がる草原。目には見えないが、緑の川が流れている。魚がはねる、エメラルド色に輝く飛沫。空には鳥の声が聞かれた。腰をおろしていた木陰から立ち上がり、空を飛ぶ。今まで地平線だったものが草原に溶け込んで見えなくなる。高度を上げるにつれて風景はさらに大きく広がり、逆に流れはいよいよ明確なものになってくる。街からの流れに気がついた。ドロドロとしていて、人のいきれで生暖かく、いやな匂いがする。全ての流れは海をめざす。

いつの間にか眠り込んでしまったらしい。雨はやんでいた。もう頭は重くなかった、軽い睡眠をとったからだろう。

体の中にあるものの重さは変わっていない。が、少しずつその性質のようなものは変化しかけている。

このうんざりとした現実。その一部を破壊したとしても出口は見つからないだろう。殺されて家具になってしまうことは破壊だ。今、何をすればよいのだろうか。

ポピュラーソングらしいものが聞こえてくる。単純なリズムがいやに耳につく。交響曲らしいものも響いてくる。フルオーケストラで、偉大、荘重、神秘、そういった感じのものを必死になって表現しようとしている。汗をあたりに飛ばしてタクトを振るしかめっ面の指揮者が目に浮かぶようだ。こっけいだ……。激しいノイズが加わる。モーターバイクやジェットのエンジン音、シャウト、さまざまな躍動のうなりがしだいに大きくなり、爆発的な衝撃となる。突然、全ての音が止む。耳に残る余韻……。空虚——





編集後記

皆様の多大なる応援と、協力によって、発刊以来の立派なスプリング絵巻が完成した。どれをとっても自信溢れる大作で、皆様をうならせたことと思うが、まだ読んでない記事があるのなら、早く読んでその素晴らしさに、胸をふるわせて下さい。

これを書いている所は、ポカポカと暖かく、つい上着を脱ぎたくなってしまふほどの陽気です。――実は、ストーブにあたりながら、暮れのあわただしい自治会本部室で書いているのです。

ともかく、スプリング第18巻は完成した。これを傑作とするのも、取るに足らぬ駄作とするのも、これからの人生の糧とするのも、冬の寒い時に薪の足しにするのも、すべてあなた次第。